



| | |
|------------------|---|
| Title | 日本における地政学思想の展開：戦前地政学に見る萌芽と危険性 |
| Author(s) | 佐藤, 健 |
| Citation | 北大法学研究科ジュニア・リサーチ・ジャーナル, 11, 109-139 |
| Issue Date | 2005-01 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/22346 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | 11_P109-139.pdf |



日本における地政学思想の展開

— 戦前地政学に見る萌芽と危険性 —

きとう たけし
佐藤 健

目次

| | |
|----------------------------|-----|
| 序章 | 110 |
| 第1節 はじめに——地政学の意味 | 110 |
| 第2節 日本における地政学の受容と展開 | 111 |
| 第1章 京都学派地政学——皇道と「世界史の哲学」—— | 113 |
| 第1節 小牧実繁の思想形成とその背景 | 113 |
| 第2節 「皇道」地政学としての小牧地政学 | 115 |
| 第3節 「京都学派」としての地政学——二つの京都学派 | 117 |
| 第4節 京都学派の実態——「吉田の会」 | 120 |
| 第5節 京都学派地政学の影響力 | 126 |
| 第2章 日本地政学協会における地政学 | 127 |
| 第1節 協会の結成と機関誌『地政学』の使命 | 127 |
| 第2節 日本地政学協会の影響力とその意義 | 129 |
| 結論 | 131 |

序 章

第1節 はじめに ― 地政学の意味

最近の「地政学」ブームは、「地政学的 geopolitical」という言葉に主導された面¹とアカデミックな期待に後押しされた面の二つによるものと言える。前者はキッシンジャー Henry A. Kissinger がリアルポリティークの意味で geopolitical を頻繁に用いたことに端を発した、空間を示す言葉としての地政学の「記号化」であった。それに対し、後者は政治地理学が国内領域から国際領域へとその対象を拡大したことと、それと同時期に起きた、国家に従属してきた地政学への反省から、旧来の「帝国主義的な」地政学から脱却した新たな地政学を追求しようとした一連の動きに端を発するものであった²。特に、新たな地政学への動きは、世界の動的な把握を可能とする地政学的思考の確立と、恣意的に世界を「空間」化した地政学的言説の分析という、異なる潮流を包含しつつ進行しているものと言える³。

地政学は本来、19世紀末にラッツェル Friedrich Ratzel の政治地理学説⁴と国家有機体論をもとにチェーレン Roudolf Kjellen によって確立されたとされている。チェーレンは、国家学を5つの系統に分類したものの一つとして、国家を空間的な存在、地理的な有機体として考察する部門としての「地政学 Geoplitik」を規定しており、基本的にその意図は国家の多元的な把握であった⁵。ただ、この様な論理の根底には、国家を国民あるいは民族の自然本能に支配された集団的有機体と規定し、自然範囲を占めることと自給自足能力を有することこそ、国家の理想であるとするような「生存空間」論が存在しており、それこそが地政学が「帝国主義的」とされる由縁でもある。この種の国家概念における地理的な「意味」の考察こそが、以後のドイツにおける地政学の隆盛に繋がり、後発的帝国主義における国家空間拡大の正当化に有益な論理となり得たことは否定できない。

近年、国際関係を論じる際に有効な「学問」と

しての地政学の可能性を主張する論者も現れる中で、我々は改めて地政学を考察する必要があるだろう。科学としての地政学がその帝国主義的指向性や恣意性を如何に克服するかという問題は依然としてある。ただ、地政学における地理的な意味を持つ非普遍性は、実は単純な空間正当化論理を担保したというだけでは捉えられない。地理的特殊性は同時に政治的普遍性への挑戦でもあり、単線的発展史観に支配された近代主義的世界観に対し、それを修正する有力な意味も持っていた。つまり、後発帝国主義の自己正当化に繋がるものであったにしろ、地政学は多元的な世界観の上に広がる多様な政治現象を把握する可能性を持っていたのである。

我々は、かつて帝国主義的な地政学とされ闇に葬られた理論の中に、そうした可能性を見ることが出来る。それこそが、本論の舞台となる戦前日本における地政学論である。日本における地政学の流れは、一元的な西洋中心的世界観に対し、地理的特殊性に基づいて固有性・多元性を主張するという点で、特徴的であった。そこに見えるものは大東亜共栄圏空間の偽りの正当化であると共に、単線発展史観に対する多元的世界観の萌芽でもある。特に1940年代の日本における流行は象徴的であり、日本の地政学論は、ドイツ地政学の影響を受けつつ、戦時体制下という特殊状況の中で、大東亜空間という前提によって独自の地政学を追求しようとしたものであった。地理という非普遍的な要素をベースに世界を捉えようとした地政学が、当時の日本における主体性の強調に繋がったという事実は、地政学が持つ地理的特殊性が地理的な想像力を喚起する際の可能性と危険性を示すものであったし、地政学ブームがもたらす地政学の一般化が、いかなる帰結を生み出すのかを示唆している。日本の地政学を分析することによって、後発帝国主義国家において地理という概念が如何に大きな意味を持っていたかを理解しようとすると共に、政治という普遍性と地理という特殊性の重なり合いがもたらす歴史的意味も明らかになるであろう。

本論では、日本における地政学、特に1940年における二つの地政学グループに焦点を当てながら、日本における地政学の実態とその意味を考察していきたいと考えている。

第2節 日本における地政学の受容と展開

1925年に日本に地政学が紹介されて以降、終戦の1945年までの20年間は日本における地政学の時代であったと言える。日本における地政学は大きく分類して三つの時期に分けられる。特に、藤沢親雄や飯本信之らによって地政学に関する、ないしは地政学という概念を用いた論文が出され、地理学分野を中心に新たな視座がもたらされた1920年代、いわゆる「前期」に、その基礎が構築されたと言えよう。それに続く形で、地理学分野での議論は下火になりつつも、一方で政治学者らによってアジア主義論の中での地理的一体性が論じられた1930年代の「中期」が存在し、そして、1930年代末期より戦時体制下の進む中で、ドイツの地政学者ハウスホーファーのブームと、それ以降に続く地政学ブームをもたらした「後期」へと至ることとなる。その中で本論が主題的に取り組むのは「後期」である。そこで、ここでは主題の理解に必要な限りで前・中期を簡単に見ておきたい。

日本における地政学の出発点は、国際法学者藤沢親雄による、新たな視座を有した国家学としてのチェレン理論の紹介であったと言えるが、実質的な意味での出発点は、地理学者飯本信之による「地政学」を用いた移民問題の考察であった⁶。飯本の論理は、「国家の栄枯盛衰消長」を、人間の「生活空間」を拡大し「拡張力を常に新しく養って」いくための要因⁷とした上で、移民・植民問題を有色人種と白色人種による人種争闘と理解する世界観を前提としている。飯本は、その様な人種争闘の中で生活空間を求めて黄色人種が世界に向かうことを、彼の理解における「地政学的に妥当」するものとして分析するのである。それは白色人種の不自然な領土獲得が生み出す不均衡な人口分布に対する日本人の生活空間の拡大の主張であったと言え、「民族的自決の問題」という形をとった、

移民問題によって世界的に窮地にあった「持たざる国」日本の擁護に過ぎない。つまり、それは、自然な世界秩序を主張することによって非自然的な欧米的秩序世界に対する反発を示したものに他ならなかったのである。

飯本は、自然と人類の関係において、一方で、決定論的な「原因と作用」の関係、もう一方で、自然からの制限は人類の発展の動機と特色を生じさせるというある種の可能論的な「理由と帰結」の関係という、二つの連鎖を主張している。しかし、一方的かつ短絡的ではないにしろ、根本的に自然決定論を肯定した地人関係（大地と人間との関係）が、そこから生み出されることを忘れてはならない。飯本は「個々の人間の強い意思の力は地的諸条件を超えて自然的な軌道の外を走る恣意的行動を取」らせるが、しかし「かかる行動の結果は、全歴史の長い経過の中に結局中庸的な程度に落ち着く」として、各事象における「最も根本的力は国家の地的羈束性、即ち地的空間の継続的諸条件に」あるとする。ここにおいて、飯本は「地政学によって将来の国家又は社会の宿命に対してある程度迄推測し得べき認識に到達する」という認識を持つ。「地的観点より国家行動に関する存在(Sein)、必然(Müssen)の研究に基づく総合的理論より、更に当為(Sollen)の国家を眺め、現実具体の国家行動の合理性、非合理性の価値判断に及び、以て国家の合理的な合目的な政策の樹立に貢献せねばならない」⁸という言葉に、彼の地政学の真意が示されている。それはまさに、自然性となるべき道を選択する方法であると同時に、自ら望む自然性を恣意的に規定する方法ともなりうるものでもあった。

しかし、その背景に存在しうるものは、絶対的な欧米世界観の有する普遍的なシステムに対しての、地理という特殊性に基づく反抗なのであり、だからこそ、地理学による多元主義の主張に繋がるといえる。この地理の特殊性—非普遍性の主張は、いわゆる「中期」における地域主義論に伝播し、アジア地域の地理的一体性の強調へと用いられていくことにもなる。

これに続くかたちで登場したのが、本論の主題でもある「後期」の地政学である。「後期」の地政学は1930年代末期からの短期間ではあるが、戦時体制下の中で地政学の流行を伴いながら、地理の持つ特殊性によって「普遍的な」世界を克服しようとした意味で、注目すべき時期であった。その様な時期において中心的な活動を為していたのは、次の二つのグループである。一つは京都大学文学部地理学教室主任であった小牧実繁を中心とした、いわゆる地政学の「京都学派」（以下では、小牧を中心とした地政学グループを「京都学派」ないし「京都学派地政学」とし、いわゆる西田幾多郎、田辺元を中心に「絶対無」をテーマにした哲学集団である一般的な「京都学派」については、「哲学の京都学派」と記す）であり、いま一つは、地理学者の他、政治学者や軍人も参加した日本地政学協会（以下「協会派」）である。この二つの「地政学」は同時期に起こったにしろ、その背景や思想内容に大きな違いを見ることが出来る。

ただ、この二つの地政学を概観する前提として、ハウスホーファー Karl Haushofer に触れなければならない。それは、彼の文献が大量に出版されることで、日本に地政学ブームが起き、そして、その下地の上で二派の活動がなされたと言っても良いためである。ハウスホーファーの著作は1930年代末期より次々と翻訳されていたが、基本的に、彼の名前を日本社会に知らしめたのは『太平洋地政学』⁹であった。すでにドイツ語原書版が1924年の出版当初から日本において紹介されていたが、実際に、この著書の日本語版がもたらした意義は、地政学を一般化したという点であろう。

そもそも、ハウスホーファーは1909-10年における軍事オブザーバーとしての日本勤務の経験¹⁰を原点として、ドイツにおける東アジア研究者として地位を得、その上で、自らの地政学論を展開させていった人物である。「日本はドイツ地政学の原体験でありモデルである」という言葉はまさに彼によって象徴されていると言って良い¹¹。

その様なハウスホーファーの日本論の特徴を端的に述べるならば、太平洋空間における日本の自

主決定の「擁護」であった¹²。彼の言葉が日本の知識人に受け入れられた背景には、彼の政治力があったにしろ¹³、結局は、彼の書物が日本に対し好意的な外国の書物であったという点が大きく作用したことが言える。ハウスホーファーの地政学が祖国ドイツのための科学であったことは否定することは出来ないが、ただ、「ドイツが世界大国となる途上において単に日本を利用しようとする」ものであったという「間違った見解」¹⁴を全面的に支持するほどのものではない。結論から言えば、ハウスホーファーの地政学論は日本において、一つの「加速装置」として起動した。つまり、ハウスホーファー地政学から読みとれる、太平洋を舞台にした「自主決定」論的世界観と、ドイツのための帝国主義的世界観という二つ側面への素直な反応として、日本の地政学は展開されたと言える。この二つは必ずしも相反するものではなく、彼の太平洋分析が、太平洋におけるアジア人種の勃興要因とアングロサクソン系諸国の衰退を眺めていたものであるとするならば、容易に理解できる。何にしろ、日本に向けられた、外からの「高貴な」擁護を含んだ心地よき声に後押しされた「受容」と、ハウスホーファー論理さえも結局は「ドイツのための論理」であるという真実が生み出す「反発」という二つの側面によって、日本のための日本的な世界観を作り出す地政学が構築されることとなった。ハウスホーファー地政学は、その意味で、逆説的ではあるが、地政学の「日本化」の土台と推進力を提供したと言えよう。

地理学者飯塚浩二は次の様な言葉でハウスホーファー・ブームについて述べている。

「彼（ハウスホーファー）の善意は、彼が彼の代表的著作の対象に選んだ『太平洋生活空間』の、彼のいう『自主決定』とやらの中心勢力であるかと思われたその島帝国のたそがれ時に、たまたま演ぜられたささやかな喜劇について責任はない。……（もし、）彼に何らかの関係をもつとすれば、それは彼が七十余年の全生涯をもって描いた悲劇が、……東洋的なインテルメンツォ（間奏曲）の挿入によって、いっそういたましいものに印象

づけられるという意味においてにすぎない。」¹⁵

確かに、彼に「責任」はない。だが、その島王国の黄昏に演じられた「地政学」という寸劇に、格好の舞台装置を提供した点で、ハウスホーファの地政学論が持つ意味は大きいはずである。その舞台は、演目が例え悲劇であっても、喜劇であっても——そして、どんなに駄作であったとしても——、そこで演じられたものを華々しく飾り立てたのである。そして、まさに、そこで演じられた悲劇と喜劇こそが、京都学派と協会派であったと言って良いであろう。

第1章 京都学派地政学

— 皇道と「世界史の哲学」—

第1節 小牧実繁の思想形成とその背景

日本における地政学の二つのグループにおいて、明確な姿を提示したのは京都学派のほうであった。1936年に京都帝国大学地理学教室主任となった小牧実繁を中心としたグループである京都学派は、その根本的な目標を「日本地政学」の建設として掲げており、それは明確に皇道思想と結びついたものであった。小牧ら京都学派による「日本地政学」の特徴は、日本文化の伝統の中に地政学の伝統を発見することであり、日本精神の強調と地理学と日本地政学の皇道による連結であり、欧米による謀略史を暴露する実践であった¹⁶。小牧の姿勢は、政治地理学との隣接分野とし、かつ政策科学としての地位を主張してきた従来の地政学とは異なり、「皇道」思想に彩られた、ある種独特なものであった。まさに、それは西洋の世界観に対する独自の世界観の構築を促すものであったと言って良い。

そのような小牧の精神的背景は1940年に出版された『日本地政学宣言』から読みとれる。同書収録の「修学院雑記」で、「高等学校に入学した頃から、私は本心、氏神や祖霊を拝むようになった」¹⁷と小牧は述べているが、そこに彼の精神的原点があるかのように思える。しかし、小牧の思想の具体的な核は1927年における満州旅行及び欧

州旅行の経験と1938年の欧米での経験にあったと言える。小牧は1927年に満州へ旅行し、その後、すぐにヨーロッパへと向かっている。彼は英国に滞在中、欧州大戦休戦記念式典を迎えた英国の緊張した雰囲気と、そこに見える威厳高き愛国心を眺め、「何たる荘嚴の光景ぞや。挙国一致、万民一致」と当時の日記に記した程の感動を受ける。そして、「その日私のたましいは、故国を思い、祖国を憂えて大きく揺れたのである」。「昭和二年。当時世間で最も忌み嫌われ、凡ての知識者には嗤笑の的でしたらあった軍国主義者。私はその日自ら好んで軍国主義者にすらなったのである」と言い放つ。それは、小汚い「帝大生が左翼の宣伝ビラを撒きつつ、ワッショワッショと群闘乱舞している」「悲しくも日本全体の実情」を憂い、真に国を思う人士なき現状を嘆く小牧が、異国の地において自らの愛国心を発揚させた瞬間でもあった¹⁸。その姿勢は当時の彼の満州論にも表れている。「当時吾が国一般の風潮は満州問題などには我不関焉、一部には満州放棄論すら潜在していたと言われる程の環境にあった」中で、小牧はそれに対抗する満州強硬論的意見¹⁹を論じることとなる。

「軍国主義者」となった小牧は11年後の1938年にも欧米を旅するが、そこで見たものは、大英帝国がかつての威厳高き姿を失い、「英国は滅亡す」の言葉そのままの国になっている哀れな姿であり、整然とした光景と活気ある民族を映し出したドイツ帝国の勃興であり、そして、アメリカにおける、選挙権も与えられず経済的にも困窮した日本人移民の姿であった²⁰。誇り高き愛国心と発展するドイツ、虐げられた日本移民というファクターは、世界が変動しつつあるという認識と共に、世界それ自体に対する疑念をも生み出すこととなった。その様な背景をもとに、小牧は同じ年の暮れに「日本地政学」を声高らかに主張するに至るのである。

「新たなる日本地理学から発展すべき、新たなる日本地政学が、歴史的伝統的なる日本の精神と共に、吾が国策の基礎でなければならないことも勿論であります。将来吾が国策が新日本地理学、新

日本地政学を要求することは愈々大なるものがあることを私は信じて疑はないのであります。』²¹

小牧は、既成地理学や文検地理学に代わるものとしての新たな地理学——日本地政学——を示そうとする。そこに至る意識は、「軍国主義者」という名の愛国主義者を誇る小牧による日本外交の正当化であり、日本外交を窮地に立たせている欧米列強への対抗心であった。

この時点、1938年までにおける小牧の世界観はそれほど具体的なものではなく、その地政学論もさして具体性を有するものではない。ただ、そこにあるのは、それ以前の日本の地政学論においても論じられてきた西洋的世界観への反発であったように思える。小牧の一連の思想は「一種のアジア的農業社会を基盤とする運命共同体への回帰」を意識していたとされる²²が、それは西洋的世界観への反発の裏返しに過ぎないものであった。その点で、日本地政学の隆盛の背景について、反西洋イデオロギー、国際的孤立、日本的伝統への回帰、という要因が存在するという竹内啓一の指摘は、実に的確であろう²³。しかし、それらは必ずしも同時平行的ではなく、むしろ欧米列強への対抗心と日本の窮地という現状から派生した連鎖的な思想行為であり、それに伴う西洋的世界観への批判と、そこから日本的世界観が創出される、という一連の流れの中で存在するものと理解すべきである。

日本地政学を宣言した小牧の直後の論説は、一体性を有する東亜を脅かす欧米への批判を述べる中から出されたものであるが、それは単純な地理的気質の喚起に過ぎない。小牧は、東亜、特に日本の「地政学的位置の優秀性」を気候的な多様性と広域での米の生産に求め、さらに、東亜は、「地域的統一性に富み」、「諸民族間の親近性は極めて大きいとする。よって、「政治的、文化的なる一民族として統合せられ得る可能性は」大きく、「東亜諸民族の親近性」からも、「東亜新秩序の建設に対して、……これが必然性を確信するも決して誤りではない」と評価する²⁴。それは、「中期」における「アジア主義」的論説の中で、例えば蠟山政

道が、歴史的政治的な地域概念としてのアジアの一体性を地政学を用いることで担保しようとしたのと同じ視点であった。

その一方で小牧は、現状において、日滿支の連繋が脅かされている要因を東亜外の勢力に求めていく。小牧は日支関係に存在する対立を欧米列強による策謀であるとし、「吾々は蒋政権を咎める前に、先ずその背後にあって之を踊らしめた老獪英国を首魁とする現状維持派勢力、並びに共産主義の仮面のもとに貧欲にも支那を蚕食せんとする赤色ソ連の侵略的勢力、更に深くは国際資本主義勢力なる蔭の力を憎まざるを得ない」²⁵と指摘する。

小牧の認識によれば、「支那の所謂欧米化——日本でもそうありますが——欧米化ということは、実は欧米の、東亜を植民地化しようとするイギリス的な謀略であり、その系統的、老獪なる政策であったことに気づくものは少なく、遂に支那の支配階級なるものには滔々たる利己主義から、欧米依存の傾向が漸次濃厚となり、ここに満州事変或いは今次の支那事変を生むということになった」²⁶とされる。つまり、東亜の新秩序を妨害しているのは、西洋の思想——共産主義も含め——を無批判に受け入れ、西欧追従した支那や日本の知識階級であり、それ以上に、断罪すべきものは、その様な追従を当然のものとした西欧それ自体であると見ていたのである。それは、かつて、パリのカフェでただ一人満州強硬論を論じ、自らを「当時世間で最も忌み嫌われ」た「軍国主義者」と回顧せざるを得ない様な、その「環境」に対する、小牧の憤りそのものであった。だからこそ、このような意識から出でた小牧の論理が、欧米に「歪曲」された現実を「本来あるべき当然の姿」へ是正しなければならないと指摘するのは、当然な帰結であったのであり、地理学者たる小牧が、その歪曲された現状を維持する学問が欧米の地理学であると指摘するのも、また当然のことであった。

「従来の地理学が、欧米中心の、著しく歪曲せられたる現実の世界の忠実なる叙述説明に終始したのは、甚だしく不甲斐なきことと言わざるを得ない。日本当来の地理学は、歪曲せられざる、本来

あるべき世界の姿を示さなければならない。それは世界新秩序の建設を指導する如きものでなければならない²⁷。

小牧によれば、この様な現状世界の地理学的な「歪曲」は西欧文明、特にイギリスによってもたらされたとし、その「謀略地政史」を指摘する。例えば、欧米によって作為的に不自然に括られた世界境界図であり、本国への経済依存性を強められ従属させられた自治領であり、英国によって不当に歪曲され作られた豪州における人口密度の低さであり、産業形態を英国の作為によって変えられたタイであり、さらには、高緯度の領土の面積が広大に見えるメルカトル図法の採用によって英国が自己の勢力範囲を過大に知らしめていることまでも、「歪曲せられたる景観に過ぎず、その本然の姿でないことは、かくて瞭然たるものがある」と批判するのである²⁸。

では、本来あるべき姿を見出すための方法とは如何なるものであったのか。小牧は、人為的歪曲の発見において、歪曲の歴史と歪曲以前の地理の認識を重視している。「日本地政学」とは「時間の軸に従い縦に過去・現在を貫き以て未来を指向する歴史と、空間の軸に沿い横に中心・外辺を連ね以て世界を一体とする地理と、両者一如の研究の上に」なされるものであり、それによって「本然の姿」が明らかになるとされた。具体的には小牧らは各国の真なる地誌を記述することを通して、「本然の姿」を見出そうとする。その成果は『世界政治地理体系』として刊行されることとなる。つまり、「現状の歴史的研究」により現状における歪曲と不合理の所在を「指摘」し、「歴史の地理的研究」により歪曲と不合理が存在しうる要因を「摘発」する、その結果として、そこにおける「正しい」道への標を求めていくことになる²⁹。小牧にとって、自然の「可能性」を正しく「開頭」することは、「正しい歴史を創造する」ことなのであり、それこそが「正しい人間の使命」なのであった³⁰。このことは、自然からの制限——地的決定論——と人間の意志——可能論——との間にこそ、「正しい」歴史が見出せることを示唆している。小牧の

目指す「地理学」はまさに「現状のままの諸現象、現状のままの諸関連の考究、謂わば、存在の科学^{ザイン}のみに終始せず、当に現実せらるべくあるべき姿の顕示、あるべき諸関連の考究、謂わば当為の科学^{ゾルエン}としての性格を具有し来る。……政策学とも言うべき科学、更に言えば最高の道徳科学たるの特質を有する³¹」ものであり、それは地政学が有していた「政策性」の側面の強調であったと言える。

では、日本地政学が提示する「本然の姿」を示す、つまり自然のもつ可能性を正しく開頭する基準とは何なのであろうか。そこに小牧は「皇道」を当てはめる。「本然真正の姿の実現こそが即ち皇道の開頭に外ならないのであり」、「天地自然の真理」である「皇道」の実現こそが正しい歴史の実現である。よって、皇道においては政治も道徳も合致するがために、日本地政学は低次の政策学を超えた、実践性と真理を包含している「学」であると小牧は指摘する。日本地政学はドイツ地政学や英国地政学、支那地政学とは異なるものであり、「今後皇道の開頭と共に、……生成発展すべき日本的創造の学なのである」と結論づけられることで、小牧の一連の日本地政学論は完成されることとなる³²。

それは、まさに「主体性」を持った地政学の誕生を意味していた。その意味において、日本地政学の源流を江戸時代の経済思想家・佐藤信淵や吉田松陰に求め、ドイツ地政学からの脱却を意図したのは当然であり³³、また、日本の世界観の構築を推進したことは必然でもあった。それは、社会思想の「日本化」の波に、地政学が飲み込まれた結果であったことは否定できないが、単なる迎合的姿勢の産物ではなかったことは理解すべきである。

第2節 「皇道」地政学としての小牧地政学

小牧地政学の基本的な核は、西洋的世界観への反発にあると言え、それを補強するものとして、日本の世界観の創出がなされたと見るべきであろう。つまり、小牧の一連の思想形成は、西洋世界への反発から新たな世界観が生み出されたものと

言える。ただ、小牧の場合、より日本的な、かつ主体性を保った「皇道」思想を、その新たな世界観に当てはめていた。一方で、小牧地政学は皇道を核としつつも、それを実現する方法には各国地誌の真なる解明を用いている。その点で、小牧地政学には、反西洋という動機から世界観の中心となる皇道思想と、世界観を補強づける「世界史の哲学」的な多元的歴史観に基づいた地誌論という、ふたつの思想が存在していることになる。

その意味で、理想像となるべき皇道に対し、その方法論として示される「本然の姿」論の展開は、小牧地政学が「皇道地政学」と「京都学派地政学」という二つの顔を持っていることを示すものであった。この一見相反する二つの顔が如何に共存していたのか。それを理解するために、小牧の「皇道」議論と「世界史の哲学」的議論を見る必要がある。

そもそも、小牧の「皇道」の強調について、竹内啓一は、小牧らが『『日本的なもの』の強調とはうらはらに、欧米の地理学やゲオポリティクスの理論に精通していて、それらの理論の矛盾や限界をよく心得ていた……。国家有機体説にもとづく Reich や Lebensraum にかえる『皇道精神』をもってれば、環境論を克服することが出来る、というよりも不要になるという論理を心得ていた」と指摘している³⁴。その点で確かに日本独自の地政学ではあったとも言えるが、まさにそれは当然なのであり、小牧の議論の根底は「皇道」の強調にあるようで、実は「現状維持勢力」の打破なのであり、それを論理立たせるための道具として「皇道」が用いられたのである。

小牧の地政学論は、戦時体制が進む中で東亜だけではなく、東南アジア、太平洋全域、オーストラリアと、その対象を拡大させていった。それに伴うかたちで、日本は「現人神の御陵威」のもと独立を保ち得たという主張や、「太平洋は皇国日本の抱擁のもとに再び白人侵略以前の本来の世界、……換言すれば、その地理と歴史との特殊性に従った、即ち神ながらの世界にかえされなくてはならない」という言葉に見られるように、小牧の

霊的な言説への傾倒は強まっていくことになる³⁵。それは「皇道原理」によって論理的飛躍を克服しようとした一方で、状況が進展し世界観を拡大せねばならない中で、その神話も加速せねばならなかった結果でもあった。

確かに、「日本は世界の全性格をここ日本の一点に集中し統合しつつあるのだ。実に日本は世界に発展してこれを総合統一すべき世界の中心たるの自然的基礎をも与えられている」³⁶という主張は、小牧の世界観が世界的な規模に至ったことを示すとも言えるが、その様な主張が必ずしも小牧に限られたものではないことも事実である。「スメラミクニ日本こそ世界万邦の中心たるにほかならない」³⁷という小牧の言葉は、当時の知識人において主張されていた皇道実現の世界観、すなわち神話に示された「八紘一字」という理想と、日本を中心とした新秩序世界の創造の主張と質的に差異はない。「八紘一字」とは日本書紀にある「兼六合以開都、掩八紘而為宇」がもとになっている。つまり、世界を一つの家とすることを意味しており、当時においては「萬民各々その所を得、共存共栄の実を挙げるという真正の世界新秩序」という理想そのものであったとされていたが、それは天皇中心世界と聖戦論を伴った家族国家観の主張に他ならない。野村重臣の「世界一家」論をはじめ齊藤忠、徳富蘇峰らの言説にも見られる³⁸、この種のウルトラ・ナショナリズムの思考が、小牧の議論の中にも見られたことは、その意味で驚くに及ばない。

この点で小牧の皇道思想観は「一般的」なものであったが、皇道思想が彼の世界観を構築する上で重要な意味があったことから、小牧地政学を「皇道地政学」と呼ぶことは妥当である。ただ青年時代に氏神を熱心に拝んだことから、小牧が熱心な皇道論者だったということだけに、彼の思想的背景を限定すべきではない。小牧の思想は、根本において列強による現状世界秩序からの打破から導き出されたものであり、その中で、「皇道」は理想像を付与すると共に日本の主体性を意味するものとして用いられたのである³⁹。

小牧の皇道思想はこのことから二つの意義があると言える。一つは、欧米に従属した知識人及び知識そのものへの反発として、「主体性」をもった原理としての「皇道」が主張されたという点である。それは、欧米思想を無批判に受け入れてきた、つまり、歪曲されたままの現状を受け入れてきた日本や地理学への批判であり、主体性の維持とは、それへの反発ということでもあった。小牧の主張の根底には、世界において日本の立場が低く且つ理解され得ない現状に対し、そのような環境を作り出した欧米と共に、欧米の思想や秩序を受け入れてきた日本の政策責任者や知識人への痛烈な批判が込められていると言える。彼にとっての是正せねばならぬ「歪曲」とは実は、欧米によって「歪曲」された現状を「歪曲」されたものと認識しようともしない、アジアの知識人そのものであった。

これに対し、皇道思想のもう一つの意義は、西欧科学の克服という意味での皇道論理の強調という点である。皇道論理は小牧の地政学論を補完し、特にその理想像として論理的な核であったと言えるが、そのための方法論として、歪曲された現状を認識し打破するため地誌研究が重要な意味を持っていた。それは地政学が「科学」としての立場を維持するものでもあった。しかし、小牧は西欧的世界に従属する科学からの脱却も意図する。だからこそ、小牧は科学としての地理と歴史を中心に据え、さらに、「精神」との結合をさせることで実践を組み込んだ、「実践的科学」を主張するのである。小牧にとっては、欧米の科学さえも歪曲されたものであったが、「科学」それ自体の否定はしておらず、正しい科学によって正しい認識が可能になるという意識が存在している。それ故に、小牧らは世界各地の地誌をまとめることで地理的及び歴史的認識への正確な把握を目指しており、それこそが彼らにとっての、歪曲された「科学」に対する「真の科学」の実践であった。だからこそ、小牧は「本然の姿」を示す基準に「皇道」を用いたと言える。それは、西欧的科学に対する日本の主体性を持った科学としての意味を、「真の科学」に付与するものであり、欧米的世界観への批

判における方法として西欧科学を用いる矛盾を、皇道観を組み入れた独自の「科学」を用いることで克服しようとした結果でもあった。また、それは同時に、理論的な欠陥を皇道論理で補うことも容易にしていたのである。

第3節 「京都学派」としての地政学——二つの京都学派

皇道論理に対し、もう一方の顔としての「京都学派地政学」としての立場は実は明確ではない。そもそも小牧地政学が何故に「京都学派」と呼ばれるのかと言えば、小牧地政学が「哲学の京都学派」の世界史の哲学理論に一見類似しており、小牧地政学の方法論が、真なる地誌の解明による「諸世界の世界的な多元史的な論理によって生じている」と考えることが出来るためである。

「現状の歴史的研究」と「歴史の地理的研究」をもって地域の真なる姿を見出し、世界の多元性を見ようとした小牧らの論理について、それ自体が「京都学派」の地政学とされることに対し、いわゆる「哲学の京都学派」とどう関係あるのかが問題となる。そもそも京都学派哲学の定義は「西田(幾多郎)と田辺(元)、およびこの二人のもとで何らかの形で〈無〉の思想を継承、展開した思想家のネットワーク」⁴⁰とされている。基本的に小牧は西田一派に属するものではないので、哲学における京都学派とは呼べない。では、地政学の「京都学派」と呼ぶときには妥当性があるのだろうか。先に「一見」という言葉で指摘したが、小牧らの思想には「世界史の哲学」論との類似を見出せる。それは、小牧地政学が西洋帝国主義地理学によって「歪曲された」世界をただすことを目的の一つとしていたことによるためである。また、西田門下の「京都学派」が「日本地政学」の論理的支柱であったという指摘⁴¹や、小牧門下の室賀信夫が「戦前における京都学派の『世界史の哲学』に代表される、ヨーロッパの克服作業の中での地政学に与えられていたその地理学的批判という役割を……認識していたのかもしれない」⁴²という指摘もあり、そこから、「世界史の哲学」との繋がりが

を見出せるかも知れない。

そもそも小牧らを「京都学派」と呼ぶ根拠としては、一つは、小牧自身が自らの地政学を「京都の地政学」として指摘した点があげられる。小牧は、天皇に近く、皇国の原動力たる京都において、吉田松陰らに由縁ある京都帝国大学において、日本地政学が起きたのは当然であり、「京都が一つの大きいなる精神の源泉となっていた」のであったと言う⁴³。

ただ、基本的には「京都学派」という名称は「東京学派」と対応させる形で用いられる⁴⁴ような「京都の学派」ではない。竹内も波多野澄雄も「いわゆる京都学派」、「いわゆる地理学界の『京都学派』」⁴⁵としており、さらに波多野は、小牧の門下生米倉二郎が「一元的ヨーロッパ化」した「高次の古代」である現「近世」に対し「高次の近世」を提示すべきだ、という歴史観を示していたことから、彼らを「西欧文明の終焉と人間社会の直線的進歩を信じた一九世紀的オプティミズムへの批判という側面で、シュペングラーの文化史観と重なりあう歴史観を展開する一派」⁴⁶と規定している。確かに、小牧らには、「京都の」地政学者というだけでは限定され得ない思想性が存在したと言える。

京都学派地政学を理解するうえで、ひとつの鍵となるのが、欧米帝国主義によって「歪曲された」地理を皇道地政学によって正そうとした、いわゆる「本然の姿」論である。欧米帝国主義の植民地支配によって従属させられてきた非欧米地域、特にアジアの解放はなにも京都学派地政学に限ったものではないが、その一つの類型として小牧は地理的なアプローチから、欧米帝国主義によって歪曲された世界の認識に対し、正しい姿としてのアジアの独立を論じていた。

このようなアプローチに対し久武哲也は、一種のマルチカルチャリズム的な思想をそこに見出し、また、京都学派哲学の一員たる高山岩男の思想との類似点を匂わせている。つまり、地政学の「京都学派」が、そう言われる所以は、その理論的本拠地が京都大学にあったというだけではなく、

その思想が「哲学の京都学派」とある種類似的なものがあったことが想像できる。特に、多元的史観に基づく「諸世界の世界」⁴⁷論は、欧米の相対化をなし、「本然の姿」論を確立してくれる。むしろ、小牧らの地理的な歪曲の摘発と本然の姿の指摘は、「諸世界の世界」を論じるための作業の一部ともなるべきものでもあった。

確かに、この二つの「京都学派」の関係は明確ではないが、「哲学の京都学派」の思想が、京都学派地政学における論理の展開に何らかのアイデアを与えたことは否定することは出来ない。その証拠となるべきものは、小牧門下の米倉二郎が著書『東亜地政学序説』において、彼が目指すべき地理学の立場を「西田幾多郎博士及田辺元博士により完成されつつある絶対弁証法」であるとしていた点であろう。米倉は「哲学の京都学派」の思想をもとに、「世界は一であるがそれは多数の個体からなり、個体はそれぞれの種に属する。……個と種と世界とは三位一体的存在であり、互いに他の二つを媒介するものと考ふべきである」とした上で、個体と世界を媒介する地盤としての「種族又種社会」を規定し、その種社会には「それぞれ特殊なる自然環境があり」、「世界は種社会の並存である」とする。米倉は「地理学の対象とする世界はこの種社会が空間的に横断的に並存して、互いに交差して存在する世界であり」、地理学の目標を、相異なる自然類型によって形成された種社会それと環境との絶対弁証法的統一における理解であるとする⁴⁸。

この様な米倉の意識が、地政学の京都学派における思想的根底に存在したのであれば、そこに二つの京都学派の接点を見出せる様に思える。そのことは同時に、地政学と、京都学派哲学の一員であった高山岩男の思想との関連性も見出すことが出来る。

高山と地政学との関係で、ひとつの鍵となるのは、1940年の『思想』において「国土の問題」についての特集に際して書かれた論文「歴史の地理性と地理の歴史性」⁴⁹における「天人合一」の思想の展開である。ここにおいて、高山は、世界史の

成立には歴史性に対し地理性が必要であるとし、「歴史と地理の交わるところに現実の世界史が成立している。地域の特殊性とそれに基づく政治、経済、文化の特殊性なきところに世界史は成立せず、また成立すべき深い根拠は存在しない」と述べる。地理的な差異があつてこそ、世界史が生まれ出てくるのであり、その意味において、彼は単線的史観を批判する。その一方において、国家と自然の軸のみを強調するような地的決定論は精神的歴史を無視しているとし、環境と人間は動植物界と衣食住との媒介によって間接的に成立する関係であるとする。かつ、地理的に類似した空間であつても異なる歴史が存在してきた事実を指摘し、さらに、歴史とは人間が作り上げるものであり、「地理的決定論が破れるところが人間の歴史が始まる場所である」と主張する。この意味において、真の世界史は歴史性と地理性のバランスの上に成立するものとなる⁵⁰。

高山は、自然決定論も自然可能論にも偏ることはない。彼自身、歴史が人間の意思によって綴られることを前提とし、自然を自由意志の対象とする場合においては、自然は必然ではなく可能性になるとするも、一方において、可能性の全体系というものは(つまり、自然性は)、地域によって相違があり、それは人為を離れて自然が決定しているのであり、「我々は自然の可能性の全体系は決定的のものであり、主体による可能性の選択利用はこの限界内部に於いてのみ成立すると考える外ない」とする⁵¹。つまり、自然によって決定されたある可能性の中から人間たる主体が選択することによって歴史は成立するという考えが、高山の地理／歴史観として成立している。この様な思想は、地的決定論に偏るとされる地政学への批判ともなるが、しかし、地政学が、特に日本における地政学思想が単純な地的決定論に傾斜していないこと、そして、京都学派地政学の根本思想が、「歪曲された」現状の「本然の姿」への回帰にある点を考えると、むしろ、地政学との類似性を見出さずにはいられない。

高山は、自然の可能性に対する人間の自発的選

択において、環境と主体との関係に積極的な秩序を認めてよいとする。それは「選択」が地域の特殊性にも主体の自由による恣意的偶然にも基づくものではなく、「地理的環境と精神的主体との間の呼応的合致」が起きるためであるとするることによる。この様に、自然の密かな欲求と主体の自由と恰も呼応するかのごとく合致する、つまりは「このような呼応的合致或いは呼応的調和の成立するところに、地理的可能性は地理的現実となり、意志的可能性は精神的現実となり、精神と自然との統一は動かし得ない唯一的な歴史性を獲得する」のである。そして、そのようにして成立する歴史は、もはや私的主観の恣意によって動かすことができない「真実の意味での客観性」を有するのであり、このことはまさに「天人合一」という考えと一致するという⁵²。

高山の歴史観の本質は、世界史において時代・地域それぞれの「完成態」が存在し、未開とか開化とかではない「絶対性」が存在するという⁵³点にある。そのような「完成態」はその時代の要求と環境の要求の呼応的合致から成立する絶対的かつ客観的なものであり、まさに天人合一論に基づく、マルチカルチャリズム的思考である。この天人合一論は、歴史的世界と主体との関係にも適応され、歴史世界の要求と歴史創造を担う人間の合一するところにこそ、歴史建設が成立するという「歴史建設の実践的原理」でもあるとされる。

この様な歴史の地理性と地理の歴史性の連関は、地政学が持っていた運命論に近いものをもかもし出している。歴史世界からの内的な欲求なるものは、小牧地政学の要求する「あるべき姿」とどこが異なるのであろうか。小牧は、自然には「可能性」が包含され、「これを正しく開闢し、……正しい歴史を創造するのが正しい人間の使命」であるとし、「人間は自然の被造物ではあるが、而も人間の生命に於ける主体的意志は之を否定することが出来ないものであり、……正しい方向に正しい計画に従って歴史を創造してい」かねばならない⁵⁴としている。つまり、小牧は、個々に規定された自然の可能性を、人間の意志を伴いつつ、「正しい」

姿に開頭することによって、「あるべき姿」を見出そうとしたが、それは、高山の歴史観が導き出す姿そのものであったのではないのか。

基本的に、小牧理論と高山の「天人合一」論とは類似する。しかし、高山が地人関係に「呼応的合致」という結果的な運命論を用いるが、小牧は真正な理想が実現された世界は「皇道」の実践によって成り立つとするところに差異がある。むしろ、高山論は、飯本信之が地人関係について「原因と作用」と「理由と帰結」という二つの段階で説明したこととの類似性を強く見るべきかも知れない。つまり、自然要因により人間の生活は規定されるも、一方で自然要因によって人間は発展の動機を得ることになり、さらに人の意志は自然的な軌道を逸れようとする、しかし、その様な両者の圧力は「結局中庸的な程度に落ち着く」と飯本が述べた⁵⁵点にである。

ただ、いずれにしろ、「本然の姿」への回帰欲求が、呼応的合致に類した思想を根底に抱いていることは事実であろう。小牧らの地政学は必ずしも地的決定論に傾斜していたわけではなく、むしろ、高山の言葉を借りるならば「地域性も……歴史的」であり、その意味で、「歪曲された」地理への批判は、単線史観への批判とも取れ、地政学者の地域共同体思考は天人合一論による歴史世界の内的要求の産物の体现であった。その意味で地政学は、少なくとも京都学派地政学は、意図するもせざるもマルチカルチャリズム的な思考によって形成されていたとする点で、京都学派哲学との類似点が見出せる。

基本的に、「哲学の京都学派」は、明らかに皇道主義とは対極にあり、彼らの「世界史の哲学」は皇国至上主義とは一線を画していた⁵⁶とされているが、その一方で、彼らの「世界史の哲学」はヨーロッパの相対化を示しており、いわゆる「本然の姿」論に通じている。ここに二つの京都学派の断絶と連関を見ることが出来る。この連関性こそ、京都学派地政学が各地域の真なる地誌の解明という方法によって、各地域の真なる姿を解明する、つまりは、ある種の「地域史」を確立することで、

多元世界観を示そうとした一連の思想行為に大きな意味を付与するものであった。「諸世界の世界」論における地理的な側面を小牧らに見出そうとする試みは、この点において現実味を帯びるのである。そして、それこそが小牧地政学のもう一つの顔であるとも言える。

第4節 京都学派の実態——「吉田の会」

さて、このような「世界史の哲学」と「日本地政学」との関連性について、一つの接点として大きな意義を有していたのが、先にも触れた米倉二郎であったと考えられる。京都学派地政学は1930年代末頃から活発化してきたと言えるが、小牧以外にも米倉二郎が早くから地政学に注目していたとされている。米倉は1937年に中国戦線拡大についての地政学的考察をまとめ、その分析は1941年に出された米倉の『東亜地政学序論』に収められたという⁵⁷。この著書において、米倉は、地理学を「地理的唯物論、唯物弁証法、又観念弁証法を超えて絶対的弁証法を方法」とすべきであり、「人類の無数の種的社会はその成立し来つた自然と一体不可分のものであることを弁証しなければならぬ」と主張する。その上で、歪曲された現状世界の摘発と、世界の諸民族の本来の姿の回復とによって、「日本を云はば家父長とする家族的国家団結」と「近代化されたアジア的農業社会」⁵⁸を基盤とした大東亜における広域圏の実現を求めている。

このような米倉の地政学的な考察が1937年において形成されていたことに対し、京都学派の一員だった村上次男が回想にて、小牧がそれにより「ますます地政学に傾いていかれた」と述べている⁶⁰が、それが真実であったとすれば、米倉の思想の持った意味を考え直す必要があるだろう。つまり、これは、「哲学の京都学派」の思想が小牧の地政学へ如何に影響を及ぼしたかという点で、米倉を介して西田らの論理が小牧にもたらされたという可能性を示唆するものである⁶¹。だが、それ以上に、このことは小牧地政学全体の形成における門下生の持っていた意味を再認識する必要があることも示唆しているのである。小牧の地政学論の形成過

程に関しては、地政学京都学派としての一思想集団として、小牧らの活動を概観することで見る事が出来る。

京都学派地政学は、小牧の他、小牧の門下生らによって担われていたが、彼らは基本的に小牧の思想の元で主張を展開していたと考えられる。彼ら門下生と小牧の年齢差はほとんどが十歳以上あり、また、京都学派の活動期が1930年代後半から45年までであったことを考えると、京都学派自体が小牧思想であったと言えることにもなる。その意味で、彼らを「学派」とするならば、「(地政学の)京都学派」とは、小牧実繁を中心とした、彼と彼の門下生による「本然の姿」論をベースにした地理学者の思想グループとすることが出来る。

地政学の京都学派の主立った活動を指摘するのならば、一つは『世界政治地理大系』の執筆であったと言える。各地域の地誌の記述を目的としたシリーズとして、『満州・支那』(米倉)、『蘭領印度』(別技篤彦)、『印度支那』(室賀)、『土耳其・シリア・パレスチナ』(野間三郎)、『印度』(浅井得一)、『北極と南極』(川上喜代四・小牧)が出版され、また刊行はされなかったが、『日本』(小牧)、『濠州』(和田俊二)、『太平洋』(別技)、『シベリア・蒙疆・西藏』(三上正利)、『アフガニスタン・イラン・イラク・アラビア』(松井武敏)、『欧羅巴』(野間)、『アフリカ』(朝永陽二郎)、『北アメリカ洲』(川上)、『中南米』(柴田孝夫)が予定されていた。彼らの殆どが30歳前後の若き研究者であり、地理学教室に在籍経験を有する者たちであった。この一連の活動は、小牧の意識にあった歪曲された世界の是正という主題に対する、各国の真なる地誌の記述をなすことに即したものであり、「日本地政学」の一環であり、重要な補助装置でもあった。同じように『大東亜地政学新論』においては、共栄圏の範囲を各所に分け、ハワイから西アジアまでをカバーする形で、野間をはじめとしたメンバーが論じている⁶²。

村上次男の回想からも、当時のメンバーの役割を見出せる。

「私が加わったころも、各自が世界の地域を分担していた。アメリカは助教授室賀さん、ヨーロッパは専任の講師であった野間三郎君、南アジアは浅井得一君、シベリアは三上正利君、オーストラリアは和田俊二君、中国は米倉二郎さん、東南アジアは別技篤彦さん、アフリカは朝永陽二郎さん、局地は川上喜代四君……にという具合である。その後、別技さんはインドネシアへ、浅井君はビルマ(ミャンマ)へそれぞれ司政官として赴かれたため、太平洋諸島を受け持っていた私が、それらの地域もカバーすることになった。」⁶³

この様な小牧と門下生達らの活動について、村上は「この日本地政学を経済的に支えてくれたのは、軍部であった。特に師団長クラスの将校OBの有志からなる『皇戦会』が大きな後援者であったようだ」⁶⁴と指摘している。つまり、軍部の資金のもとで、京都学派は実体的な活動をしていたと言えるのであり、むしろ、陸軍との関連こそが、京都学派を一地政学グループへと発展させたとも言える。地政学の京都学派と軍部との関係は1939年頃からあったとされており、いわゆる「吉田の会」と言われるグループがその活動の中心であった。「吉田の会」とは、「京都帝国大学地理学教室の小牧教授、室賀助教授を中心にして、軍部、将校OBの『皇戦会』からの資金援助を受けながら、吉田山の西麓、吉田上大路の民家を借り上げ、調査、読書会、研究会、本の出版を行ってきた、非公然の集まり」⁶⁵であるとされ、1939年から終戦まで活動を行っていた。メンバーは小牧の他、米倉、別技、室賀、川上健三、松井、朝永、御子柴幸一、野間、浅井得一、浅井辰郎、柴田、内藤玄匡、川上喜代四、三上が、浅井辰郎により戦後指摘されており、おそらく、この15名がコアメンバーであった⁶⁶と思われるが、ここに含まれない村上なども会への参加を回想で述べており、いわゆる小牧門下生は何らかの形で関与していたと考えて良いだろう。その意味で、「吉田の会」とは京都学派そのものであったと言えよう。村上の指摘からは、資金は潤沢であり週一回の会合が持たれ、順次、メンバーが発表をしていたこともわかる⁶⁷。また、

「陸軍参謀高嶋大佐・間野少佐もアジア各地の経営方針樹立のため、川上健三氏を通じ、小牧に会の設立を要請したとされ、それは「皇戦会」の「地理的研究機関」としての立場であったという証言もある⁶⁸。

このような「吉田の会」に関する史料は少ない。特に、その実態に関しては不明な点が多い。ただ、僅かながらも、それを推測させる史料は存在する。その中で特に重要な意味を持つものとして、「通称『吉田の会』による地政学関連史料」なるものがある。この史料は古本屋において軍事史料の一部として発見され、そのコピーを大阪市立大学の水内俊雄が翻刻し雑誌『空間・社会・地理思想』6号にて公開したものである⁶⁹。仮製本されたこの史料は軍部の資金提供のもと、会の発表を活字化したものであると見られている。発見されたものは14の文章からなり、「吉田の会」における研究発表のうちの一部であると思われる。内容としては、室賀「本邦に於ける官撰地誌編纂の概要」、室賀「印度支那半島に於ける英仏の侵略とその政策」(昭和14年12月)、「皇戦地誌に関する意見」(昭和15年2月5日)——浅井辰郎「皇戦地誌とは如何なるものとなすべきや」、柴田孝夫「皇戦地理学について」、松井武敏「地誌は如何にあるべきか」、別技篤彦「皇戦地理学の意義」、野間三郎「皇戦地誌をして如何なるものたらしむべきか 皇道の主戦力としての地理学に就ての覚書」、室賀信夫「皇戦地誌についての私見」、米倉二郎「皇戦地理学素描」——、「学戦原理」(無署名、昭和15年2月)、野間三郎「東方問題の基礎条件」(昭和15年8月)、室賀「シンガポールの軍事地理的考察」(昭和16年1月)、室賀「西貢港の地政学的位置に就きて」(昭和16年8月)となっている。水内による解題によれば、「吉田の会」の経済的支援グループである「皇戦会」との密接な関連性を考慮すべきであるとし、これらの文章が、会に出席していた軍部幹部の前での発表によるものであった可能性、当時の「吉田の会」メンバーが小牧を除き、ほとんどが「大学院生」クラスの年齢層であったことを考え、「文章全体に見られる、精神主義高揚の唱和に関して

は、軍部将校の前での沮喪を許されない緊張感がそうさせたかも知れない」と指摘している⁷⁰。ここに出た文章に関し、その内容からすべてを判断するのは安直ではあるが、京都学派と軍部との関係性、特に政策的影響力を見る上で重要な資料であり、さらには小牧地政学の論理的形成が如何にしてなされたかを示すものでもある。

さて、ここにおける14の文章に関して、外観的にわかることは、室賀の文章が多いことと、「皇戦地誌に関する意見」としてまとめられている8つの文章と無署名であった「学戦原理」が対応している可能性があることである。前者に関しては、室賀報告の他の論者への影響の可能性などから、水内は、ここにける実質的リーダーを室賀と見ていることから理解できる。後者に関しては、「学戦原理」が内容的に「皇戦地誌に関する意見」と類似する部分も多く、対応関係は存在していると言えよう。また、その「学戦原理」自体はおそらく小牧のものであるという久武の指摘⁷¹もある。また、この史料における各発表は1939年から1941年までのものであり、太平洋戦争突入以前より活発な活動をしていたことが推測でき、その内容も、①各国地誌と地的重要性の分析、②皇戦地誌、という大きく二つに分類することができる。

まず、各国の地誌であるが、室賀がインドシナ半島、シンガポール、サイゴンについて、野間がトルコについて論じている⁷²。

室賀によるインドシナ半島論は1939年12月に作成されたものであり、時期としては援蒋ルート遮断を意図した北部仏印への進駐の10ヶ月前にあたる。彼の主張はインドシナ半島が英仏による極東への侵略の拠点となっているとして、特に英領マレーの経済、仏印の対支影響力を脅威としつつも、マレーでの華僑への依存の高さや、仏印での本国主義と現地の反発から、その弱点を一方で指摘している⁷³。ついで、シンガポール論は、このインドシナ論の一年後の1940年12月に作成されたものであり、北部仏印進駐を受け、マレー半島の攻略を意識しているように思える。マレーの要所であるシンガポールに関し、本来、大艦隊を配

置すべき意図がなかったという点、軍港としての欠点(熱帯的気候と、重工業を含む後背地の不在)から、軍港的価値を過大評価すべきでないとする。一方で、インドと極東・オーストラリアを繋ぐ重要地点としての意義、軍事的な価値の強調による英国勢力の維持と対日圧迫政策をなす政治的な価値を軽視すべきではないとする。室賀はこの分析の後、シンガポール攻略のために陸上からの攻撃と、そのための三つの方策として南部仏印進駐、タイとの軍事協定締結、雲南作戦(雲南省・昆明への攻撃に伴いビルマにおける英軍守備隊を釘付けにする)を提示している⁷⁴。また、サイゴン論に関しては、1941年6月20日に作成されたものであり、南仏印進駐の一ヶ月前にあたる。ここにおいて、室賀は、南シナ海を中心とした交易網において重要な地位を演じているとして、サイゴンを含んだ仏印南部海岸の地理的重要性を説く。特に、サイゴンが開発されてこそシンガポールなどの価値も評価され得るとし、日本の南方計画の一環として認識されるべきであると、即時南部仏印進駐を主張している⁷⁵。

一方、野間によるトルコ論は、1940年8月に作成されたものであり、欧州戦線を見る上での要所とも言える「東方」地域—基本的にトルコを中心としてバルカン半島、小アジアに至る問題を論じている。特に、この文章が書かれた時期にはフランスの降伏、ソ連軍のエストニア・ラトビア両国への進駐など、欧州戦線での変化があり、欧州への関心が高まる中での議論であったと思われる。野間は、「東方」における外交史を論じた上で、「東方」地域の価値、コンスタンチノーブル海峡の地理的な意義を、欧州新秩序形成における鍵であると指摘している⁷⁶。

ここにおける地誌論は、以後の彼らの議論的ベースともなるものであった。例えば、室賀によるインドシナ半島、シンガポール、サイゴンの分析は『世界地理政治大系』においても有用されたと考えられ、また、一般雑誌における議論⁷⁷においても、この分析がそのまま用いられている。さらに、ここにおけるサイゴン論は、一部省略された

形で「仏印の地政学的意義」という論文として同年(1941年)11月号の『現代』に小牧の署名で掲載されており⁷⁸、雑誌掲載時の文章では、「以下の如きが本年六月二十日に於ける吾々の最後の決論であった」とされ、7月の南部仏印進駐を踏まえた形で「南部仏印の地政学的意義の重要性を感じる事が深刻であっただけに……、責任者の正しい措置に対して唯々感謝」という言葉を付与して、日本地政学の意義を裏付けるものとされている。野間のトルコ論も『世界地理政治大系』に反映されており、「吉田の会」での議論、研究の意義を評価することができよう。当然、ここで触れた史料の他に未だ公にされていない史料があり、それらに関しても、その後の彼らの論文のベースであったということは想像に難くない。

他方、この「吉田の会」における地誌研究の発表に対し、軍部幹部が会に出席していた可能性から、これらの内容が現実の戦争遂行に何らかの影響を与えた可能性を無視できない。例えば、室賀の戦術—シンガポール攻略は海上からではなく陸上からの攻撃によるべき—が山下奉文大將によるシンガポール攻略作戦において用いられたという指摘がある⁷⁹が、今回の史料の中における室賀の「シンガポールの軍事地理的考察」は、それを裏付けるものであると思われる。室賀論文では次のような指摘がなされている。

「若しシンガポールを撃つべしするも、従来の論者の説く如く直ちに海軍をもって海上より攻撃せよというのが策の迂なるものと考えざるを得ない。由来重装備の要塞に対する海上よりの攻撃が労のみ多くして攻少なきことは近代戦史の数うることであり…、而も英国は多年之にそなえ、幾度か演習を繰り返して防備の手段を考究してきたのである。然るに英国が不測の事態の発生に慌てて現在狂奔しつつあるものは陸上攻撃に対する防備である。…その備えざるを撃つは兵の常道である。日本のシンガポール攻略戦は、されば陸軍を主体として行われなければならない」⁸⁰。

彼らの地誌研究は、軍事的な展開と歩調を合わせながら、共栄圏構想などの中で、軍の侵略計画、

占領計画と相俟って、各地域の分析という形で有効なものとしていたことが想像できる。このような事例の他に、「吉田の会」と軍部間に如何なる影響が存在したかは定かではないが、「吉田の会」の研究が時局・戦局に伴う形でなされており、軍、特に皇戦会の資金援助を受けていたことから、陸軍のブレイン的活動をした可能性を無視することは出来ないであろう。

次に、皇戦地誌についてであるが、「皇戦地誌に関する意見」(1940年2月5日作成)として、8人の論者それぞれが、皇戦における地誌がいかなるものかということ、主に、実用的な地理学の遂行と、地理と歴史の統合により、欧米によって歪曲された現状を解き明かし本然の姿を示すことを指摘し、新秩序建設のための貢献を主張しており、皇戦を戦うための学問のあり方、特に地理学に焦点を置いて論じている⁸¹。

これと対応関係にあるのは「学戦原理」(1940年2月作成)という無署名の文書であり、小牧のものではないかと言われている。「学戦原理」において、「学戦とは総力戦の一翼として学問を中心とする戦いである」と定義したうえで、「総力戦」、「皇戦」、「学戦」、「歴史と地理」という項目で論じている。ここでは、総力戦を「新しき国家統治の一形態である」とし、武力、政治、経済、思想、学問などの要素による高度の連関性から成り立つとする。特に皇道は世界万民共存共栄の大道であるとし、皇道開闢を目的とした総力戦、皇戦総力戦を訴える。その一翼として学戦は、西歐的価値観に立脚した「在来諸学の迷妄」を打ち破り、真正なる学問を構築するものであり、実際には、総力戦の直感的把握、本質を解き、歴史的かつ将来的な検討より、その内容を具体化するとする。その方策としては、「総合歴史地理」の建設による実践的学問、端的に言えば、現実の正しい認識による歪曲された現状の指摘であり、全世界的な視点のもと、「天地人一如」として地人関係を考察するべきとする⁸²。この「学戦原理」は基本的に皇戦における学問のあり方として「実践性」を主張するものであるが、結果的には、「皇道世界地理」と「皇

道世界歴史」の総合による、歪曲性を暴露とあるべき姿の記述という実践を指摘している。

「学戦原理」は内容的に「皇戦地誌に関する意見」と類似した点が多く(例えば、歴史と地理の統合による皇戦への参与、実践性の重視など)、表現的にもまた類似点があることから、明らかに対応関係があり、特に「学戦原理」は「皇戦地誌に関する意見」の各論者の意見をまとめたものではないかと思われる。また、「学戦原理」の内容は小牧の自説にも似ている。特に、小牧の『日本地政学宣言』と内容的に類似した箇所もあり(西歐的科学への批判と皇道理念実現のための新たな学問の主張)⁸³、かつ「学戦原理」が「皇戦地誌に関する意見」と対応した上での文章であり、「皇戦地誌に関する意見」において室賀、米倉ら主要なメンバーの文章があることに対して、「学戦原理」を小牧のものであると考えることは、妥当な推論であると思われる。

これらのことから、一つの推論として、この1940年2月5日付の「皇戦地誌に関する意見」が小牧の地政学思想の根底に大きな影響を与えていることが言えるのではないかということが指摘できる。実は小牧自身の文章として1940年2月5日付けのものは少なくとも2点存在する。二つとも『日本地政学宣言』に収録されているもので「日本当来の地理学」と「地理学より地政学へ」である。前者、「日本当来の地理学」は副題に「同志の言葉」とつけられているが、その内容は、実は「吉田の会」において公表された「皇戦地誌に関する意見」の各人の意見を部分的に収録したものであることがわかる。現状で確認しただけでも、松井武敏「地誌は如何にあるべきか」⁸⁴、野間「皇戦地誌をして如何なるものをたらしむべきか—皇戦の主動力としての地理学に就いての覚書」⁸⁵、室賀「皇戦地誌についての私見」⁸⁶と、「日本当来の地理学」のそれぞれの文章に類似性があり、省略や加筆があるものの表現的にも同一であり、同じ文章と見て良い。ただ、小牧の文章においては「皇道地理学」などの表現が多様に用いられており、その分は新たに加筆されたと思われる。また、柴田「皇戦地理学

に就て」の一部分⁸⁷、同じく別技「皇戦地理学の意義」の一部分⁸⁸とも「日本当来の地理学」は類似性を持っている。確かに、部分的な不一致はあるものの、実際的には、「皇戦地誌に関する意見」と「日本当来の地理学」の同一性がわかる。さらに詳しく見るならば、「皇戦地誌に関する意見」での収録順番と、「日本当来の地理学」においての順番とが一致していることもわかる⁸⁹。小牧の「日本当来の地理学」が2月5日付けであり、同日付けの「吉田の会」での史料における数人の論者の主張と類似的内容をもつことを踏まえ、以上のことから、小牧の「日本当来の地理学」は、おそらく1940年2月5日になされた「吉田の会」における「皇戦地誌に関する意見」の発表を受けて、それをまとめたものであると結論づけられる。部分的な内容や表現が異なるのは、「吉田の会」での口頭での発表をテキスト化し「史料」となった際に若干の修正がなされた、もしくは小牧の方が「日本当来の地理学」として文章化する際に独自に再構成した、などの要因が考えられる。また、当日の発表において、他にも発表者がいた可能性も皆無ではない。その後、この「日本当来の地理学」は、再度、加筆され、他の論文と再構成され、一本の論文として、1941年6月7日付けで小牧のみの署名による「日本地政学の主張」として出されている⁹⁰。

さて、同じ1940年2月5日付けの論文として、同じく『日本地政学宣言』収録の「地理学より地政学へ」が存在する。これは内容的には、小牧が「日本地政学」なるものの概要を主張したものであると考えられ、歪曲された現状から本然の姿を取り戻すこと、歴史と地理の一体的研究、日本地政学の独自性が主な点として述べられているが、おおよその内容が前論文である「日本当来の地理学」に即しており、おそらく、「吉田の会」での「皇戦地誌に関する意見」発表——及び、それをまとめた「日本当来の地理学」——を受けた上で、小牧が再度簡潔に「日本地政学の主張」としてまとめあげたものであると言えよう。「地理学より地政学へ」論文における部分的表現と、「吉田の会」での「皇戦地誌に関する意見」発表、さらには「学戦原

理」とのそれには類似性もあり⁹¹、以上の4つ(小牧「日本当来の地理学」、同「地理学より地政学へ」、
「吉田の会」史料「皇戦地誌に関する意見」、無署名「学戦原理」)には密接な関連性があると言える。そして、これまで指摘したこと、及び日付から推測する時間的序列から、まず、「吉田の会」での「皇戦地誌に関する意見」発表がなされ、それを聞いた小牧がその発表を「国家的実践的な地理学の構築」という視点でまとめた形で「日本当来の地理学」として再構成し、その上で、さらに「地理学より地政学へ」として洗練したのであり、一方で「吉田の会」での「皇戦地誌に関する意見」発表を「総力戦の一翼たる学戦」という視点でまとめたものが「学戦原理」であったのではないかと考えられる。

「日本地政学」の主張において、「日本当来の地理学」及び「地理学より地政学へ」論文は、その思想的根底たる重要なものであると言え、その論文のもとが「吉田の会」における室賀ら門下生の発表によるものであるとするならば、小牧の思想の形成において、他のメンバーが関与していることとなり、「京都学派」の認識を再考する必要がある⁹²。

さて、このような「吉田の会」であるが、まとめると、一つは軍などのブレイン的な意義をもった思想活動をしていたこと、もう一つは京都学派の主要な活動たる地誌研究や、『世界地理政治大系』などの文献のもととなる発表をなしていたこと、最後に、そこでのメンバーの発表が小牧の日本地政学思想を形づくる一要素であったのではないかという、以上三つの重要な意味合いをもって言える。特に後者二つであるが、会での成果が小牧地政学において重要な地位にあったことから、京都学派における小牧以外のメンバーの比重を軽視してはならないことが言えよう。つまり、「皇戦地誌に関する意見」だけではなく、先に触れた米倉の地政学論をはじめ、会の「リーダー」と見られる室賀の地誌研究などが、その後の小牧の思想形成やメンバーの意見に影響を与えた可能性も排除することができないのであり——現に室賀

や野間の地誌研究は、各雑誌などで日本地政学が「歪曲」を指摘する際に用いられている——、「吉田の会」を含めた小牧の門下生の議論が京都学派地政学の思想形成過程で果たした役割を見直すべきであることを示唆している。

第5節 京都学派地政学の影響力

このような思想性を見せていた京都学派地政学の影響力を如何に評価すべきかは大きな問題である。ただ、彼らの活動を、京都帝国大学地理学教室に限定された閉鎖的な思想集団ではなかったことは理解しておくべきであろう。小牧の『日本地政学宣言』などの著書や、『世界地理政治大系』などの出版物がどれほどの影響力を有していたかについては明確なことは言えないが、『日本地政学宣言』は当時としてはよく売れたらしく、賛同者も多かったとされる⁹³。ただ、彼らの活動を見た場合、そのような出版物以外に、一般雑誌への論文掲載が多かったことを考慮すべきである。彼らの社会一般への露出は、機関誌『地政学』を出版していた日本地政学協会の面々と比べても決して劣るものではなかった。例えば、『週刊朝日』にて、1941年12月（開戦前）には小牧を中心にして室賀、別技、朝永、野間、和田、三上による「大東亜における白禍を暴く」という座談会を行い、その内容を掲載している⁹⁴。また、同じ月、真珠湾攻撃後に、小牧の『「大東亜戦争」宣言』という短い論文を掲載している⁹⁵。座談会における小牧らの議論は、東亜における白禍を暴くということにあった。そこにおけるポイントは第一に、大東亜共栄圏思想との整合性を意識し、印度支那半島、蘭印を中心として、ハワイやオーストラリアに関しても触れている。第二は、戦略論としての地理学の地位を意識し、共栄圏確立のためにどの地域を抑えるべきかを指摘している。第三は、旧秩序による歪曲された地理を暴露するため、例えば、シンガポール港の意味は政治的なものに過ぎない、ハワイも地形的に大艦隊の展開は困難という欠点があるなどを指摘し、このような誤った認識を日本地政学によって是正すべきという主張がなされているこ

とがあげられよう。一方、『「大東亜戦争」宣言』では、真珠湾攻撃成功を受けて書かれたものであり、開戦を八紘一宇の具現のための「皇道世界維新戦」、日本による聖戦であるとする。また、アメリカ大陸の原住民は本来アジア人であり、アメリカは本来アジア人のものであり、太平洋は「アジアの海」であるという主張を、「戦勝病」の雰囲気の中で為している。小牧のこのような主張は1942年に『アジア』誌に取り上げられ、「小牧はアメリカ人読者の注目的」⁹⁶になったともされる。

京都学派の言論活動は、この『週刊朝日』に代表されるようなテーマで、他の一般雑誌においても展開されることとなり、その知名度は高かったと見られる⁹⁷。また、『地理学』などの専門雑誌にも小牧以下数名が論文を掲載している⁹⁸。一方、小牧は日本諸学振興委員会の昭和十八年度地理学部臨時委員を務めるなど、文部省管轄の研究事業にも参加していた⁹⁹。さらに、ラジオ放送媒体でも、1942年2月23日より日本放送協会（NHK）の早朝の連続講座にて「地政学上の大東亜」というタイトルで6回の放送講座を行っている¹⁰⁰。

小牧らの主張は、その活動が1941年以降に活発化されることから、内容も戦局や共栄圏構想との関連を重視し、その対象範囲をアジア全般及び太平洋に向け、歴史的地理的観点から、その各地域における地的要点を戦略論と絡め指摘し、さらに、その地域における歪曲された現状の発見と、それを打破すべく共栄圏構想を展開するという一連の流れを示している。その際において、内容的には、地誌論、戦略論、「本然の姿」論と分類することが可能であり、また、各人が特定地域を重点的に担うことで世界、少なくとも大東亜共栄圏範囲をカバーしている。小牧らの意図が戦局に貢献できる学問としての地理学であることから、一般雑誌に掲載された論文の多くは大東亜共栄圏構想に即した対象地域を理解し、共栄圏確立において「日本地政学」が如何に有益かを大いに示そうとした、ある意味、自らの学問的価値の普及的なものであった。例えば、1941年に『現代』に掲載した「仏印の地政学的意義」論文¹⁰¹での南部仏印の地政学

的重要性を論じた日本地政学の意義の強調はその端的な例であるし、室賀のシンガポール攻略論など、「吉田の会」を通じた軍部への影響力も同じ意味を持つ。

その様な中で、ステファン John J. Stephan が、太平洋戦争開戦後におけるハワイ攻略に、小牧らが関与したと指摘していることは興味深い。それは真珠湾の勝利に酔う中で、ハワイに関して公的な機関による包括的検討は皆無であった¹⁰² 日本軍部が、大東亜地域に対する軍事支配の基本プランを「民間」機関——国策研究会、南洋経済研究所、そして、「吉田研究所」、いわゆる「吉田の会」——に依託したとされる¹⁰³ ことによる。ただ、このようなハワイ研究に関し、横のつながりは乏しかったようであり、小牧は助手達に、部外者、とりわけ同一テーマに携わっている他大学の研究者には情報をもらさぬよう注意していた¹⁰⁴ とされ、実際に如何なる研究報告がなされたかは明確ではない。

ステファンは京都学派地政学を、「戦勝病」の雰囲気において展開されたものであり、ハワイ—満州の東西軸と、千島列島—台湾の南北軸という地理範囲の中で、地理的、人種的、歴史的観点から親近性、正当性を担保しようとしたものと述べている¹⁰⁵。確かに、小牧はハワイと日本との人種的地理的一体性を示唆し、太平洋の一員として本然の姿を取り戻すべき¹⁰⁶ としており、門下生村上次男も「公表された最も詳しい計画」¹⁰⁷ とされる論文「ハワイの姿」¹⁰⁸ を記すなど、ハワイへの視点を維持している。だが、それ以上のものは見えてこない。現実においては、むしろ、京都学派地政学の地域的関心が包括的な視点からなされたものであることを想起させる。ステファンがハワイを担当していた村上へのインタビューにその論の多くを依存しているとすれば、日本地政学とハワイの関連性が過大に評価されていることを想定する必要があると言え、また、久武哲也は、ステファンが京都学派地政学の大東亜共栄圏の地理軸にハワイ—満州を当てはめたのは、村上が自らの回想において「ハワイは小さな満州国」という発言をし

たことが影響しているのではと述べている¹⁰⁹。その意味において、村上らによるハワイに対する研究は京都学派地政学の思想の一部——本然の姿の指摘——に過ぎないと言えよう。

ここまで見てきたことにより、実際において指摘されることの多い論理超越型の論理の背後に、京都学派の真の姿があることがわかると思う。小牧地政学の本質は、反西洋世界観から生み出される西洋秩序への批判なのであり、皇道という曖昧なユートピア像に代替された新たな世界観を核とし、地誌研究による「本然の姿」の解明という方法論を用いることで多元的歴史観に色づけされた、日本的利益を優先させる新秩序の模索であった。彼らが京都学派と呼ばれる地政学集団であったからには、そこに潜む思想性を見なければならぬ。彼らが多元史観的な世界観のもとで地誌研究を中心とした「本然の姿」探しは、一つの思想活動として見るべきであり、近代主義的世界観への批判の先駆とも言えるものであろう。しかし、一方でその方法論、世界観における根底要素として皇道思想を用い、論理的な欠陥や矛盾を克服しようとした。それは西洋科学や価値観の絶対性に対抗する彼らなりの方法であったのかも知れないが、結局はウルトラ・ナショナリズムと恣意性に彩られた彼らのための「科学」の推進に過ぎなかった。その意味で彼らの地政学は「悲劇」の演出であったと言えよう。

第2章 日本地政学協会における地政学

第1節 協会の結成と機関誌『地政学』の使命

この様な京都学派地政学に対し、同時期に起きたもう一つの地政学は異なる傾向を見せていた。それは、ある種地理学者による多元的世界論に類する思想性を展開した一派とは異なり、まさに時局に応じるべく期待され誕生した地政学の動きであり、日本における地政学ブームの端的な例でもあった。

1941年暮れ、開戦を前にし、「従来の静態的な地理学を批判しつつ、いわば『政策科学』または『摘

出の学』として『地理学的決定論』を展開する一群¹¹⁰と評される地政学組織「日本地政学協会」が結成される。日本地政学協会は海軍中将上田良武を会長に据え、機関誌『地政学』を発行し、メンバーには飯本信之を中心に、阿部市五郎、江沢譲爾、田中啓爾、神川彦松、川原次吉郎、高木友三郎など地理学、政治学、経済学の学者や、さらには陸軍大将阿部信行などが名を連ねる混合的組織であった。機関誌『地政学』は1942年の1月号から1944年の8・9月合併号まで出されており、また、地政学講習会¹¹¹なども1942年に開かれており、講習会には教師などが中心でありながら、他の一般の人々も参加しており、その影響力は大きかったと思われる。

そもそも日本地政学協会の設立目的とは何であったのか。地政学協会が配布した「日本地政学協会の使命について」（以下「使命」）¹¹²においては、地政学の科学的検討により「高度国防国家の建設に貢献せん事を期すものである」としており、そこにおいては、地理歴史の総合的連関による研究に基づき、「国家学的基礎づけを試み、これを統一的体系にまで発展せしめる」新たな領域として地政学を位置づけている。

「国家発展への新たな認識が示される」という期待の中で、地政学は有効な戦時国策を探る「科学」であることが求められていた。ただ、「地政学的示唆」による、日本民族における海洋の強調、地域ブロックの連帯性の強調を、ある意味の「実績」と見ると、地政学に期待されていたことは、実は薄っぺらい正当性の担保であったのかも知れない。それは、京都学派に存在していたような、ある種の思想性が、ここには存在していないことを示しているように思える。「使命」では、従来の地理的見解や世界史解釈が欧米中心に記述されたため、日本における科学的観点が歪められ、科学的真実を示されなかったことを「遺憾であった」と述べられており、それは、ある意味「本然の姿」論に近いものも感じられるが、協会自体がそれを意識しての思想活動を展開してはいないし、するための思想的熟成もなかった。会長上田良武が「機

関誌『地政学』の使命¹¹³において、「新しき国家建設への発足」を謳い上げ、戦時国策へ貢献すべきものであることを強調しつつも、その内容のなさはやはり明白であった。協会の中心的人物であった飯本信之が後に語ったところでも、その設立意義は見出せない。

「雑誌はね、当時日本には紙がなかった。紙を潤沢にもらうにはどうしても軍人を頭にかつがなくてはならない。それには陸軍よりも海軍、海軍の中でも造船などをやっていた文官のような人がよいと思って、上田中将に来てもらった。」¹¹⁴

また、飯塚浩二の言葉からも、その実態が良くわかる。

「もう何年か昔の話であるが、……地形学の辻村教授は、地政学を名乗る学会の発会式とやらに招かれて列席したときの心境を、わざわざ筆者への便りで、『昨夕一つの喜劇に立ち会った』という言葉で知らせてこられた。また、法学者某氏は同じ発会式後、大したご馳走にはなる、理事には祭り上げられるというわけだったが、『君、地政学というのはありゃ一体何だね』と心安立てに著者のもとへ質しに来た。」¹¹⁵

機関誌『地政学』において3年間での執筆者総数は146名に上るが¹¹⁶、この飯塚の言葉を信じるならば、地政学協会は思想的実態のまま、雑誌にて何か「地政学」的な言葉を連ねていたという、まさに茶番劇であった。ただ、彼らの議論が本当に無意味なものであったかは、機関誌『地政学』を見る必要がある。その際、そこにおける論文は三つの傾向に分類できる。一つは共栄圏論に関する正当性を強調するもの、もう一つは地誌論、最後の一つは地政学とは何かについて論じるもの、である。

共栄圏論の裏付けとはしては、例えば、神川彦松は大地域主義を論じ、東亜新秩序建設を意識しつつ、自然的、文化的共同体としての大地域共同体論を提示している¹¹⁷。また、岩田孝三は日本が歴史的地理的に海洋的／大陸的性格があるとし、大東亜共栄圏における陸海両面的指導が日本に可能であることを指摘し、さらに、『「生活圏」の限

度を『同類文化圏』に見出そうとする所」に地政学を特徴付け、文化的類似性のある地域には「血縁的」もしくは「地縁的」な関係が存在しているため、その連帯性は妥当であり、最終的には大東亜共栄圏が印度太平洋圏へ拡大される合理性があると主張している¹¹⁸。川原次吉郎も、「日本地政学の中心課題は、共栄圏の問題である」という意識のもとで、「地理的空間が如何なる影響を政治活動に及ぼすか」という点を地政学の課題と理解し、大東亜を一つの広域圏として理解すべく「地理的運命的近接広域の一塊性」の正当性を確保することを地政学に要求していた¹¹⁹。

一方、地誌論に関しては、例えば、地的重要性を強調と日本による取得を強調した飯本信之のシンガポール地誌の分析¹²⁰や、満州を「一種の新開地」と位置づけ、日本人移民は同化浸食されることなく、祖国日本の武力財力を後ろ盾として団結した場合、満州は日本に十二分に貢献する盟邦となりうるとした有高巖の分析¹²¹、さらには、ハワイの米国との併合を「歴史的必然性」と認識し、「ハワイの戦略的価値は極めて大である」が、それ自体が戦局を左右するものではないとした元川のハワイ分析¹²²などがあげられる。

地政学とは何かについての議論に関しては、例えば、石橋五郎による、地政学は「新興科学」として、地理学、政治学、軍事学の三位一体にして成立したものであり、土地と政治の関係性を論じ、それは国策に影響を及ぼせる実行の学であるという主張¹²³や、元川の、地政学を「国家的実践の要求を帯びて政治地理学の中から出現してきた」地政学を実践的な科学であるとする分析¹²⁴、金生喜造による、国家有機体論に基づいた「国家生命の動ける力」の研究たる地政学を「経綸の学」として、過去の日本にも見出そうとする試み¹²⁵などがあげられよう。また、中原徹は地政学の科学性への疑念に触れつつも、日本における地政学は国家と「地政現象という一種の社会現象」を対象とし、技術学という形を付随させた社会科学の一種であり、ドイツ地政学と一線を画するものと主張し¹²⁶、佐藤弘が「主観性の強い政治学と、客観性

を好む地理学」を行き来する「境界科学」としての地政学は、「人によって、また、その国によって異なる見解をと」るのであり、よって「日本に即した、及至、共栄圏に應ずる新しい地政学を作りえる筈」であると述べている¹²⁷こともこれに含まれよう。

この様な論文によってつづられた機関誌『地政学』であるが、結局その中身を見ると、大東亜共栄圏に関する議論は従来の地域主義論に即したものであるし、地誌論は地理学における地域分析——戦略的な意味を含みつつも——に近いし、また、地政学の論理的な問題についての議論はドイツでの地政学議論を受けた形での地政学定義と、原著の翻訳紹介、日本独自の地政学の追究——多くは追求すべきという意味表明——に過ぎないものである。議論的にも、地政学とは何かというもののさえ曖昧のまま、さらに言えば、「地政学的」という名を付随しただけのものも多い。それは、人的にも思想的にも寄せ集めに過ぎなかった日本地政学協会が時局に応じて演じる、まさに哀れな「喜劇」であった。

第2節 日本地政学協会の影響力とその意義

この様な地政学協会の有した影響力はどう考えるべきであるか。協会派は地理学の分野においては京都学派に対し少数派ではあったが、東京のジャーナリストたちには大いに歓迎されたとされている¹²⁸。飯本は回想にて「雑誌『地政学』はよく売れて、それまでの地理の雑誌全部集めたより売れた。軍人、とくに上級軍人が良く読んでいた」¹²⁹と述べており、機関誌『地政学』を通じた影響力はあったと考えて良い。また、地政学講習会などにより教育関係者、一般人への影響力もあったと見ることも出来る。しかし、政策面への関与に関しては、「陸軍のほうは東亜研究所があり、海軍には南洋研究所があり、それらを中心に総力研究所があつて、たしか飯田中将が中心となつていた。恥ずかしながら、日本は官僚的で、軍は民間のいうことはあまり採用しませんよ」¹³⁰という飯本の言葉を信じるならば、協会は政策中枢に対す

る重要な影響力を持っていなかったと考えられる。ただ、『地政学』における執筆者の中に、陸軍経理学校教授であった岩田孝三や、東亜研究所の研究員の名¹³¹があり、地政学協会関係の講習会には海軍関係の軍人が参加していたことを考えると、軍部などとの関係性が皆無であったとは言えない。しかしながら、『地政学』における議論が現実的な具体性を伴っていなかったのであれば、現実の政策に対しての協会派の影響力を過大に評価することは、やはり出来ないであろう。

だが、この機関誌『地政学』が地政学ブームを後押ししたことは否定できない。1941年以降、「地政学」という名が入った著作が大量に出されており、また、地理学の専門雑誌の他、一般雑誌にも「地政学」関連の論文として、協会派のメンバーの名前を見出せる¹³²。ただ、その多くは大東亜共栄圏との関連の中で地政学という枠組みを論じようとする、流行の「地政学」と「大東亜共栄圏」や「南方」などを組み合わせた、まさに迎合の書というべきものに近いが、何にしろ、出版界をにぎわしてはいた。この点において、地政学協会及び、そのメンバーらによる出版物は、「地政学」という言葉の流布における重要な意義があったとは言える。それは、その意味が簡略化されつつ、一つは国策に貢献できうる「科学」としての期待感と、もう一つは地理的政治的歴史的な複合的な時事分析に対し「地政学的」という言葉を附することにより、何やら斬新かつ有効的な視点による分析であるかのように意識させるといった効果があったと言えるのである。

このような地政学の効果は、地政学に期待されていた「正当化」論理としての意味合いから捻出されたものであり、期待通りの結果であったのかも知れない。国策を「正当化」できる「科学」としての期待は、協会設立時から大きなものとしてあり、例えば、日本地政学協会会長の上田良武の姿勢からもそれを見ることが出来る。地政学を「国策を基礎づける総合的指導理論」であり、科学的方策における重要な役割をも果たすものと見る上田は、日本的な地政学に「地政学的調査研究の成

果を一般に発表宣伝することによって、国民思想の統合一体化を資し、統合された国民思想が、国策に反映しこれが隠然たる推進力になる様にし向けること」を求めるのである¹³³。それは、大東亜共栄圏を正当化するための安易な理由探しに過ぎなかったとも言える。

そのような当時の現状を理解するに大きなヒントを与えてくれるものとして、1942年の地理学者渡邊光の分析がある。渡邊は日本地政学協会にも京都学派にも参加はしていなかったが、地政学に関する鋭い分析を論じている¹³⁴。彼の分析の特徴は、地政学を、チェーレンの元来の姿のゲオポリティーク、独逸の地理学者によって採り上げられ展開されたゲオポリティーク、日本に導入され展開せる地政学、指導者及び国民がかかるものであろうと期待する地政学「希望的地政学」とに区分した点である。渡邊は、「学問」と規定された地政学が、ドイツにおいて脱ヴェルサイユ体制への実践的必要性、ナチ運動との結合、新独逸の動向に指針を与え得る新興社会科学の要求などを受け、地理的基礎の上に立って直感を以て国策に指針を与え、大衆を納得させ論理的正当性を得ることが出来るものへ変化したとする背景を理解している¹³⁵。

その傾向は当然日本にも当てはまるのであり、日本においては1925年頃の導入期で冷静な批判が加えられ「一応学界の問題から遠ざかった」にも拘わらず、地政学は1935年から1942年までの現状に至る時期に、前時期のものは無関係に紹介され、「それが大きな反響を呼んだ」のであると、渡邊は指摘する。彼の分析によれば、その背景には、満州事変を契機とした国際的な現状打破の動きの中で、新しい国策に対する拠り所を求めていたこと、ドイツでのナチスの勃興と、その指導原理に対する正当性付与として貢献していた地政学に関心が向けられたことがあるとされる¹³⁶。その様な日本における地政学ブームは、基本的に「純然たるドイツのゲオポリティークの翻訳」であるもドイツで地政学が展開した社会的背景・目的を軽視し、「独逸では」という風潮に乗じた安易な根

抛で、かつ難解な文章を用い、如何にも「高級」
 そうな印象をもたせたものか、「単なる時局的宣言
 か、或いは内容の伴わざる難解な文句の羅列で、
 何等具体的内容を伴ったものではない」とし、大
 概は本来「地理的」「軍事的」とか称されていたも
 のを単に「地政的」とかに置き換えたものにすぎ
 ないとして、渡邊はブーム自体を批判するのであ
 る¹³⁷。

だが、地政学を科学を超越した政策論¹³⁸と見る
 渡邊はそれ自体を無用なものとは評価しない。曰
 く、日本の大東亜新秩序建設及び維持に伴い、政
 治家や国民は「国策に指針と倫理性を与えるが如
 き指導原理を科学性の上に求めている」のであり、
 その樹立の可能性を地政学に望んでいるとする。
 彼はそれを「希望的地政学」と呼ぶ。「希望的地政
 学」は大東亜共栄圏の建設に沿って国策を樹立し、
 かつ、その国策による政策を大東亜共栄圏下の民
 族に納得させるための指導原理を確立させるため
 の必要条件としていた。それは、従来から用いら
 れてきた歴史学、経済学、社会学、民族学などと、
 これまで忘れられてきた地人関係を司る地理学と
 のミックスにより、科学的基礎の上に指導性のある
 政策論をうち立てられるべきであるとする。渡
 邊は「地政学は地理学の断面より見たる政策樹立、
 並びに指導原理の倫理化の手段である」と指摘し、
 特に「地」を取り上げる事に効果がある場合は、
 それを第一に思考しても良いとする¹³⁹。

「地政学は最近(1942年)のジャーナリズムの寵
 児である。之が流行する理由は多々あろうが、そ
 の最も主な理由は、この数年来の我が国を繞る国
 際情勢の緊迫化である。そして国策の樹立に、民
 心の指導に何らの指導原理が要望されたのである
 が、その要望に応え得る可能性を持つものとして
 地政学が期待されたのである」¹⁴⁰という渡邊の言
 葉は、協会派の地政学に対する指摘としてそのま
 ま当てはめることが出来る。協会派における地政
 学議論が見せた、ドイツ地政学の安易な受容、「地
 政学」という言葉だけの使用による内容の希薄さ、
 さらには、政策の「倫理化」と、正当化根拠たり
 うる「希望的地政学」としての価値の強調は、ブー

ムの中に飲み込まれ、かつ、国策正当化論理とし
 て期待されるという状況下での地政学の姿を見事
 に体現した結果であったと言える。それは、地政
 学という概念が一人歩きし、安易な期待によって
 安易な言葉の使用が繰り返される、まさに「空虚」
 化の連鎖とも言える事態が、そこに生じていたこ
 とを意味していた。このことは同時に、地的一体
 性、正当性の担保を意図した地政学の「記号化」
 と無価値な「期待」が、地政学の一般化によって、
 ある種、必然的に生じていたことを示唆するもの
 であったと言える。

結 論

基本的にこの二つの地政学グループの大きな違
 いは、その方法論の差異にあったと言える。それ
 は、地誌の解明による「本然の姿」論という方法
 論を基軸に、皇道という理想像と論理補完によっ
 て反西洋的な世界観を構築しようとした京都学派
 と、大東亜戦争への貢献を全面に押し出し、その
 為の方策を地政学に「期待」しただけの協会派の
 差異でもあった。その意味でも、この二派は共に
 戦時体制下での地政学を標榜していたにしろ、そ
 の関係性は基本的になかったと言える¹⁴¹。当然、
 思想的な類似性は皆無ではなく、特に、日本のた
 めの地政学を求めた場合、その理論的ベースは狭
 いものであり、何らかの共通性があっても不思議
 ではない¹⁴²が、明確な関係性を指摘することは難
 しいと言えよう。

ただ、双方とも突然の終演が訪れた点では同じ
 であった。京都学派は終戦に伴い吉田の会の会場
 だった家を処分し、集めた図書や資料は売り払っ
 た¹⁴³。小牧らメンバーは自ら大学に辞表を提出
 し、公職追放を受けるも数年後に解除され、小牧
 は1952年に復職し、滋賀大学学長などを歴任す
 ることになる。その他のメンバーも、地政学を封印
 し、戦後も地理学者として活躍していた。

一方、協会派の方は、機関誌『地政学』は神田
 三崎町の研数学館が燃えて、1944年暮れに終わり
 となっている。飯本などは戦後占領軍から取り調

べを受けるも「地政学」というタイトルの著書は一つもないと弁明し(論文はあるけれども)、結局は公職追放を免れている¹⁴⁴。また、同様にして協会派のメンバーに関しても戦後、地政学に封印をほどこし、多くの者はそれに係わった歴史さえも抹消してしまった。

これ以後、飯塚浩二による反省的論文を除き、1970年代に至るまで、地理学における地政学に対する議論はある種タブー視されることとなる¹⁴⁵。

この様に見てきた日本における地政学が示すものとは何なのであろうか。

地政学の特徴は地理的環境に依存した宿命論であり、恣意的な空間論理である。日本における地政学が大東亜共栄圏という空間を前提とした議論の中に組み込まれることによって、一般化し、その価値が高められたことは、それ自体が空間の正当化に適した理論であった、少なくともそう期待される理論であったことを意味している。

地政学の持つ恣意的な権力性は、それ自体が地理学と政治学によって条件付けられていることに一因がある。そもそも地理学は、空間における国家の恣意性を担保する道具として政治的なものであった。それは地理的な想像力¹⁴⁶として、フーコー Michel Foucault が「境界線というものを正当化するそのような地理学的言説は、ナショナリズムの言説にほかならない」¹⁴⁷と言い、言説としての地理学が、権力/知そのものの一形式であると示唆していることに通じる。このことは、地理概念が時には軽視され、時にはデフォルメされる中で権力性を介しながら、「作られた地理」として政治を裏付ける手伝いをしてきたことと同じ意味を有している。そこから、地政学の恣意的な権力性が誕生するのであり、しいては、地政学自体が理解しやすい空間イメージへの「還元行為」を通して権力性を取得することにもなる¹⁴⁸。

「国政に携わる識者が国際政治を『空間化』し、その特定タイプの場所や人々、劇的な事件によって特徴づけられる『世界』として表象する言説的实践」とした、オツアセール Gearóid Ó Tuathail

とアグニュー John Agnew による地政学定義¹⁴⁹もそうした文脈から理解できる。この定義に従うならば、地政学とされるものは地理的な環境に対し作為的なイメージを喚起する手段に過ぎなくなる。カルダー Mary Kaldor は冷戦を「資本主義」対「社会主義」という言葉の対立であったと指摘している¹⁵⁰が、それは冷戦そのものがイメージとイメージの対峙であるとも言えることを示している。よって、そのような冷戦下においてまことしやかに論じられた「地政学論」はイメージと作為の産物によるデフォルメされた地図の提示に他ならない。オツアセールらがジョージ・ケナン George Kennan による冷戦的言説についての分析から見出したものが、ソ連に対する地政学的表象が「非歴史的な象徴概念」に過ぎないという事実であり、地政学論の「反自然地理的」特徴であった¹⁵¹ことは、地政学の持つイメージ性という点について、我々に注意を喚起する。地政学は根本において複雑な空間現象を言説として単純化しイメージ化するある種の権力行為なのである。

このような権力性を伴ったイメージ化は、これまで見てきた日本における地政学二派に関しても見出せる。つまり、内包される反欧米世界観を軸に、大東亜共栄圏や日本的秩序世界と言った世界像を、論理的に単純化された、かつ正当であると認識させるような「空間」として表象しようとした事実は、まさに地政学そのものであったと言える。

しかし、地政学が特定空間を恣意的な「空間」にする、つまりイメージ化することが可能となるのは、実は地政学が地理という非普遍性を根拠にしたものだからである。それは、日本の地政学において、西洋世界観への批判が、多元的世界観やアジアの一体性と言った主張を導くこととなる中で、政治という普遍的な視点に対し、地理という特殊性が持つ力こそ、欧米的秩序をうち破るための大きな可能性であったと考えられたことに繋がっている。ただ、同時にそれはウルトラ・ナショナリズムに発展する様な環境的宿命論による秩序形態も内包していた点で、破滅的でもあった。

だが、その様な破滅性を含有しつつも、日本の

地政学が地理という特殊性を見出したことは、政治に対する一つの視点であったと共に、冷戦的地政学言説に見られるよりも強い特殊性への依拠でもあった。だからこそ、そこに多元的世界観が生じることとなったのである。つまり、地政学的な思考の重要性は、空間の特殊性、いわゆる「歴史の地理性」という観点から生じているものである。それは例えば、丸山真男が「日本の思想史を分析するには、日本のゲオポリティーク—地理的な環境というのは歴史的に媒介されて具体化されるけれども、相当重要な点なんです」と述べ¹⁵²、「自然的=地理的な所与」に歴史的影響性を見たことにも通じる。丸山は安易な地的決定論を取ることはしないが、「自然的=地理的条件は、ふつう他の歴史的・社会的出来事と結びついてのみ、人間の意識と行動に作用する」としつつも、日本における空間・風土の条件の重要性を意識している。例えば、それは風土からもたらされる「美意識」構造であり、自然国境による国への希薄な人為意識と強い所属意識であり、大陸との地理的距離による文化接触の独自形態性などである¹⁵³。丸山が「地政治学的要因」を、それ自体では歴史的現実全てを説明することはできないと留保をつけつつも、強調することは、日本的な思想の形成要因において地理の特殊性が持つ意味の大きさを示している。このような意識は結局、これまで見てきた日本における地政学的な思想と通底する。つまり、地政学が提示するものが地域独自の歴史性の形成である点においてである。その意味では、地政学論が提示する地理的概念が必ずしも虚偽的でも想像上の産物とは言えない。しかし他方で、そのような地理認識が生み出す想像力に我々は支配されているとも言えるのであり、そこに介在する前述の恣意性こそ、地政学論がもたらした悲劇なのであり、日本の秩序や共栄圏の正当化という過去がそれを証明している。丸山の分析に恣意性があるとは言わないし、歴史における環境要因の重要性は認めるべきであろう。しかし、我々は、地理と政治の分析を重ね合わせる時、常に地理的な想像力が生じる可能性があることを考慮する必要がある。近

年の「地域」論や「地域史」分析においても然りである。

ただ、地政学が地理の特殊性と政治の普遍性の結合により世界を表象するものであるとするならば、その権力性を考慮しても、そこに大きな可能性が存在しうるし、空間という事象把握法が意味するものが大きいことも事実である。特に、政治の普遍性に対する地理の特殊性は、特定の空間を切り出し、その空間に意味を持たせるという点で、自己/他者を決定づける一つの大きな要因たりうるものである¹⁵⁴。ある空間に特定の、それも非地理的なイメージを植え付けることで、その空間に対する行為を正当化しようとした——例えば、サイード Edward Said の言う「オリエンタリズム」という意識や、ケナンの冷戦的言説も、そうであるが——思想の裏側に、ある空間に意味を持たせることで、「世界」という一元的な空間からの離脱を試みようとした思想が存在していたことを、我々は無視してはならない。これらを帝国主義的と言うか、多文化主義的と言うかは別にしても、ここに、自己/他者の分離行為における二つの意味が存在するのである。それは同時に、地政学が表裏一体に抱える危険性と萌芽そのものでもあった。だからこそ、戦前地政学に地政学の持つ反学問的な危険性と恣意性を見た上で、その恣意性をコントロールするならば戦前地政学が持つ空間的思考それ自体に特異性——それは、ある意味、前時代性とも言える——はなくなり、さらには、ポストモダンの新たな意味を見出せる可能性が生じるのである。それは、現在の地政学に潜む危険性を意味している一方で、過去の地政学に有効的な視座があったことを示すものである。近代主義的世界観への批判をも含んだ地政学的な思考をどう扱うかという点で、まだ、1世紀も続く試行錯誤に我々は終止符を打てないでいるのである。

- 1 2002年秋に、イラク攻撃に伴う経済・金融的リスクを「地政学的リスク geopolitical risk」という概念で示すことが頻繁になされた。
- 2 この政治地理学の発展が「ゲオポリティクの

- 遺産とはまったく別の知的伝統」から導かれて
いる側面もあることを理解すべきであろう。(竹
内啓一「ゲオポリティク^のの復活と政治地理学の
新しい展開」『一橋論叢』第96号第5号(1987)
530頁)。
- 3 アメリカにおけるオツアセールとオロッコリ
ンの論争から端を発した批判地政学の研究や、
フランスのY.ラコストラによる『エロドト』誌
グループの主張などがある。
- 4 K.A. ベスラー著、手塚章訳『政治地理学入門』
(古今書院1988)14-15頁。また、ラッツェルは
国家と大地の関係性を国家学が軽視したままで
いるのならば、地理学がそれを補完すべきであ
ると考え、「『有機的な連関』によって特徴づけ
られる」「『国家と大地の関係』を考察する学問」
として政治地理学を創設した。
- 5 他にチェーレンは「経政学 Wirtschaftspolitik」、
「民政学 Ethno-(Demo-)politik」、
「社政学 Soziopolitik」「治政学 Herrschaftspolitik」を規
定している。
- 6 藤沢親雄「ルドルフ、チェーレンの国家に関
する学説」『国際法外交雑誌』第24巻2号
(1925)、及び、飯本信之「人種争闘の事実と地
政学的考察」(1)~(3)『地理学評論』第1巻9号、
第1巻10号、第2巻1号(1925-1926)。
- 7 飯本(1925)前掲(註6)(1)22頁。
- 8 飯本信之「所謂地政学の概念」『地理学評論』
第4巻1号(1928)97-99頁。
- 9 佐藤荘一郎訳、岩波書店版(1942)と、服田
彰造訳、日本青年外交協会版(1940)が存在。
- 10 C. シュパング「カール・ハウスホーファーと
日本の地政学」『空間・社会・地理思想』第6号
(2001)5頁。
- 11 同上、2頁参照。彼の地政学論の特徴は個人
的経験に基づいた単一空間的な考察、地誌的な
側面からの研究であった。また、1913年から
1944年にかけてのハウスホーファーの関係し
た書物は40冊以上あり、独自で執筆したもの
に限っても37冊ある。うち11冊は日本につい
て、3冊は東アジアに関するものであったとい
う。
- また、括弧内の言葉は、ペーター・シュラーP.
Scholler のものをシュパングが引用して用い
たものである。
- 12 「日本の旗は、太平洋に発祥して今尚ほマ
ライポリネシア人の頭上^{なび}に靡きつつある唯一の
ものである」(ハウスホーファー著、佐藤荘一郎
訳『太平洋地政学』(岩波書店1942)125頁)。
- 13 ハウスホーファーは日本滞在時の友人関係
をもとに、以後も日本政府関係者と有効な関係
を維持し、日独関係におけるキーマンの存在
でもあった。また、日本大使館を「配布組織」
として、知り合いの日本の指導的人物へ日本
関連の自著を送付するという「戦略」もなし
ていた。これらについてはシュパング、前掲
論文(註10)が詳しい。
- 14 シュパング、前掲(註10)3頁。
- 15 飯塚浩二「科学あるいは科学者と祖国」『飯
塚浩二著作集6』(平凡社1975)415-416頁。
- 16 竹内啓一「日本におけるゲオポリティクと
地理学」『一橋論叢』第72巻第2号(1974)179-180
頁。
- 17 小牧実繁『日本地政学宣言』(弘文堂1940)
181-182頁。
- 18 同上、191-194頁。
- 19 同上、198頁。小牧は具体的な内容を忘
れたとして記していない。
- 20 同上、5-9頁、12-13頁、192頁。
- 21 同上、16-17頁。
- 22 波多野澄雄「『東亜新秩序』と地政学」『日
本の1930年代』(創流社1980)30頁。
- 23 K. Takeuchi (竹内啓一)、“Geopolitics and
Geography in Japan Reexamined” *Hitotuba-
shi Journal of Social Studies* 12 (1980) 18p.
- 24 小牧『日本地政学宣言』前掲(註17)32-35頁。
- 25 同上、37頁。
- 26 同上、29-30頁。
- 27 同上、55頁。他論者の論文からの引用の
可能性もあり。
- 28 同上、81-89頁。
- 29 同上、55-56頁、77-78頁、175頁。

- 30 小牧実繁『日本地政学』（大日本雄弁会講談社 1943）42-44 頁。
- 31 小牧『日本地政学宣言』前掲（註17）58 頁。おそらく、もとは松井武敏の言葉か。松井武敏「地誌は如何にあるべきか」『空間・社会・地理思想』第6号（2001）79 頁、を参照。
- 32 小牧『日本地政学宣言』前掲（註17）76-79 頁。
- 33 小牧はドイツ地政学を「欧羅巴の世界に誕生した以上、ここにも欧羅巴的強権主義の発言を見る」と批判する（同上、79 頁）。
- 34 竹内（1974）前掲（註16）179-180 頁。
- 35 小牧『日本地政学』前掲（註30）90-91 頁、97 頁。
- 36 同上、270-271 頁。
- 37 同上、266 頁。
- 38 栄沢幸二『「大東亜共栄圏」の思想』（講談社現代新書 1995）156-159 頁、165-179 頁。
- 39 小牧は主体性を重視する。日本地政学は皇道によって発せられるとし、「最も正しき、最も純なる、主体日本の地政学である」（小牧『日本地政学宣言』前掲（註17）178 頁）と述べている。また、日本地政学の源流を見る際、江戸期の佐藤信淵らが「皇国日本の世界における主体性を把握」したことを重視している。
- 40 大橋良介『京都学派と日本海軍』（PHP 新書 2001）86 頁。
- 41 水岡不二雄「現代地理学における『地政学』の復活」『経済』119号（1974）186 頁。
- 42 水内俊雄「解題」（「通称『吉田の会』による地政学関連史料」）『空間・社会・地理思想』第6号（2001）60-61 頁。
- 43 小牧『日本地政学覚書』（秋田屋 1944）8 頁、10-11 頁。
- 44 C.W. Spang は協会派を「東京学派」としている（シュパング・前掲（註10）8-9 頁）。
- 45 竹内（1974）前掲（註16）22 頁、波多野・前掲（註21）29 頁。
- 46 波多野・前掲（註21）28-29 頁。なお、シュパング・Oswald Spengler はドイツの哲学者。文化周期の見地から西欧文明が没落の段階にあると主張。
- 47 大橋良介『西田哲学の世界』（筑摩書房 1995）161 頁。
- 48 米倉二郎『東亜地政学序論』（生活社 1941）23-24 頁。
- 49 高山岩男「歴史の地理性と地理の歴史性」『思想』第221号（1940）。また、この論文と共に小原敬士の論文やハウスホーファーの解説論文が掲載されていたことは興味深い。
- 50 同上、1-26 頁。
- 51 同上、26-33 頁。
- 52 同上、33-50 頁。天人合一とは中国の世界観の一つで天と人とは理を媒介して一つながりだと考えるもの。
- 53 同上、51-62 頁。
- 54 小牧『日本地政学』前掲（註30）42-45 頁。
- 55 飯本（1928）、前掲（註8）97-99 頁。
- 56 大橋『京都学派と日本海軍』前掲（註40）24 頁、72 頁。
- 57 村上次男「日本地政学の末路」『空間・社会・地理思想』第4号（1999）50 頁。米倉の1937年の主張は、短期解決を望む軍部からの妨害によって公表されることはなかったとされる。
- 58 米倉・前掲（註48）44 頁。
- 59 同上、216-217 頁。
- 60 村上（1999）前掲（註57）50 頁。
- 61 米倉は、西田幾多郎らの論理を多分に意識し、彼らの「絶対的弁証法」こそ、目指すべき地理学の論理的基礎と見ていた（米倉・前掲（註48）23-24 頁）。また、室賀が「世界史の哲学」における地理学の役割を認識していたのではという指摘もある（水内「解題」前掲（註42）60-61 頁）。
- 62 小牧（序）、室賀（神話と国家）、藤田元春（支那）、兼子俊一（蒙疆）、三上（シベリア、バイカル）、堀川侃（印度）、吉田敬市（朝鮮）、村上（ハワイ）、和田（大洋州）、河地貫一（豪州）、村本達郎（ニュージーランド）、浅井得一（印度）、野間（西アジア）、藪内芳彦（支那）という形で執筆している。
- 63 村上（1999）前掲（註57）51 頁。

- 64 同上, 51-52 頁。
- 65 水内「解題」前掲(註 42) 59 頁の水内の定義による。
- 66 浅井辰郎「別技篤彦名誉会員のご逝去を悼む」『地理学評論』70 A-9 (1997) 553-554 頁において指摘した小牧と他 14 名のメンバーより。
- 67 村上(1999)・前掲(註 57) 52 頁。
- 68 水内「解題」前掲(註 42) 60 頁, 浅井辰彦「皇戦地誌とは如何なるものとなすべきや」『空間・社会・地理思想』第 6 号(2001) 75 頁。及び 浅井辰郎(1997)・前掲(註 66) 553 頁。また, 高嶋大佐とは高嶋辰彦のことであると思われる。
- 69 水内によれば, この史料は駒沢大学講師石橋尚人氏が古本屋で発見し, 神戸大学助教授大城直樹氏が着目し入手したものであるが, 現物は既に予約が入っていたため, 店主よりコピーを譲り受け, それを水内が翻刻したものであるという。この史料の公開に関し, 遺族からの承諾を得てはいないが, 氏の責任のよって公開したという。また, この史料は, 「吉田の会」のメンバーの蔵書が古本屋に出回ったものと推測されている(水内俊雄「解題」前掲(註 42) 59 頁)。
- 70 同上, 60-61 頁。
- 71 同上, 60 頁。
- 72 その他に, 室賀が日本における官撰地誌の歴史について論じ, 地誌編纂事業が国土への認識という效能をもたらす重要な意義が, 必ずしも日本の歴史における地誌編纂がその意義を満たすものばかりではなかったことを指摘している(室賀信夫「本邦に於る官撰地誌編纂の概要」『空間・社会・地理思想』第 6 号(2001) 64-66 頁)。
- 73 室賀信夫「印度支那半島に於る英仏の侵略とその政策」『空間・社会・地理思想』第 6 号(2001) 67-73 頁。
- 74 室賀信夫「シンガポールの軍事地理的考察」『空間・社会・地理思想』第 6 号(2001) 98-106 頁。
- 75 室賀信夫「西貢港の地政学的位置に就きて」『空間・社会・地理思想』第 6 号(2001) 106-112 頁。
- 76 野間三郎「東方問題の基礎条件」『空間・社会・地理思想』第 6 号(2001) 89-97 頁。
- 77 小牧実繁他「大東亜における白禍を暴く」(座談会)「大東亜における白禍を暴く」(座談会)『週刊朝日』昭和 16 年 12 月 第一週号(1941) 参照。
- 78 小牧実繁「仏印の地政学的意義」『現代』1941 年 11 月号(1941)。なお, 『日本地政学』にも収載。
- 79 村上(1999) 前掲(註 57) 51 頁。
- 80 室賀信夫「シンガポールの軍事地理的考察」前掲(註 74) 105 頁。
- 81 「皇戦地誌に関する意見」『空間・社会・地理思想』第 6 号(2001) 74-83 頁。
- 82 無署名「学戦原理」『空間・社会・地理思想』第 6 号(2001) 84-89 頁。
- 83 「学戦原理」前掲(註 82) 87-88 頁(1940 年 2 月付)と, 小牧実繁「英国的謀略地政史」『日本地政学宣言』前掲(註 17) 99 頁の註, 及び「地理学より地政学へ」『日本地政学宣言』前掲(註 17) 77-78 頁(1940 年 2 月 5 日付)が類似。
- 84 松井・前掲(註 31) 78-79 頁と, 小牧「日本当来の地理学」『日本地政学宣言』前掲(註 17) 56-60 頁とが類似。
- 85 野間三郎「皇戦地誌をして如何なるものを作らしむべきか」『空間・社会・地理思想』第 6 号(2001) 80-81 頁と, 小牧「日本当来の地理学」『日本地政学宣言』前掲(註 17) 63-65 頁とが類似。
- 86 室賀信夫「皇戦地理についての私見」『空間・社会・地理思想』第 6 号(2001) 82-83 頁と, 小牧「日本当来の地理学」『日本地政学宣言』前掲(註 17) 65-71 頁とが類似。
- 87 柴田秀夫「皇戦地理学に就て」『空間・社会・地理思想』第 6 号(2001) 77-78 頁と, 小牧「日本当来の地理学」『日本地政学宣言』前掲(註 17) 55-56 頁とが内容的に合致し, 表現的にも一部極めて類似している。
- 88 別技篤彦「皇戦地理学の意義」『空間・社会・地理思想』第 6 号(2001) 79 頁と, 小牧「日本

- 当来の地理学』『日本地政学宣言』前掲(註17) 61頁とが類似。
- 89 小牧「日本当来の地理学」におけるものと類似した文章であると指摘した論文は、柴田、松井、別技、野間、室賀のものであるが、それらはそれぞれ『日本地政学宣言』の55-56頁, 57-60頁, 61頁, 63-65頁, 66-71頁と掲載され連続している。一方、「皇戦地誌に関する意見」としてまとめられた順番は柴田、松井、別技、野間、室賀と連続している。
- 90 小牧『日本地政学』前掲(註30) 3-22頁。
- 91 小牧「地理学より地政学へ」『日本地政学宣言』前掲(註17) 77-78頁, 柴田「皇戦地理学に就いて」前掲(註87), 「学戦原理」前掲(註82) 88頁などがあげられる。
- 92 当然ながら、この「皇戦地誌に関する意見」発表が、もともとは小牧の主張を受けたものであったという可能性も存在するのも事実である。
- 93 村上(1999), 前掲(註57) 50頁。出版社宛にファンレターも届いたという。
- 94 小牧実繁他「大東亜における白禍を暴く」前掲(註77)。
- 95 小牧実繁『「大東亜戦争」宣言』『週刊朝日』昭和16年12月 第4週号(1941)。
- 96 ジョン・ステファン著、竹林卓監訳『日本国ハワイ』(恒文社1984)240頁。また、『アジア』誌は *Asia: journal of the American Asiatic Association*。
- 97 確認したものとして、『週刊朝日』2度、『現代』(大日本雄弁会講談社発行)6度、『科学ペン』1度、『読書人』3度、『改造』4度があり、『政界往来』などにも論文が掲載されていた。また、『科学ペン』1941年9月号では、小牧の「日本地政学の課題」というタイトルの論文が「特集・地政治学」として江沢讓爾、国松久弥、阿部市五郎、金生喜造などと共に掲載されていた。
- 98 『地理学』1942年4月号。特集「大東亜の地政学」にて、小牧以下、室賀、野間、和田、三上、浅井得一、藤野義明などの論文がある。
- 99 その研究報告雑誌である『日本諸学研究報告』における第17編の歴史学分野で野間、米倉、室賀が執筆している。また、小牧自身も1943年11月の日本諸学振興委員会地理学公開講演会で「皇国日本の地政学」というタイトルで講演している(『日本諸学研究報告(第17編歴史学分野)』(文部省教学局1944), 及び文部省教学局編『日本諸学講演集 第17編』(1944)参照)。
- 100 『昭和18年ラジオ年鑑』(日本放送協会1943)41頁。また、その内容はラジオ新書としても小牧実繁『地政学上より見たる大東亜』として1942年に出版されている。
- 101 小牧「仏印の地政学的意義」前掲(註78) 121頁。
- 102 ステファン, 前掲(註96) 231-232頁。
- 103 同上, 236-239頁。
- 104 同上, 231頁。
- 105 同上, 203-204頁。
- 106 小牧『日本地政学』前掲(註30) 95-97頁。
- 107 ステファン, 前掲(註96) 206頁。
- 108 村上次男「ハワイの姿」小牧編『大東亜地政学新論』(星野書店1943)186-211頁。村上は食糧自給能力の欠如、良質労働力の日本人(日系人)への依存、真珠湾の港湾能力の低さから分析し、長期の海上封鎖をした上でのハワイ攻略を提示している。
- 109 久武哲也「ハワイは小さな満州国—日本地政学の系譜」『現代思想』Vol.27-13(1999), Vol.28-1(2000) うち前編, 197頁。
- 110 波多野, 前掲(註22) 20-21頁。
- 111 「第1回地政学講習会記」『地政学』第1巻10号(1942) 86頁。また、佐藤由子は、文部省による教員試験の一つである文検地理の制度から、地理教育における地政学の浸透を指摘している。「文検委員は、地政学という名で文検志願者を含めた教員を指導する体制が生じ、アカデミ—な地理学者の大部分は国策に沿った新たな活動分野ができ、地理分野はなお概して隆盛が続いた」(佐藤由子『戦前の地理教師—文検地理を探る』(古今書院1988) 136頁)。

- 112 雑誌『地政学』の巻頭における「日本地政学協会の使命について」参照。
- 113 上田良武「機関誌『地政学』の使命」『地政学』第1巻1号(1942)1-2頁。
- 114 佐藤由子「飯本信之が語った地政学」『地理』第34巻10号(1989)107頁。
- 115 飯塚「科学あるいは科学者と祖国」前掲(註16)415頁。また、前者、辻村太郎は協会の評議員として名を連ね、1942年5月に木内信蔵との連名で論文を一度だけ掲載している。後者、法学者某氏はおそらくは川原次吉郎であると思われる。川原は結局4度、論文を掲載している。
- 116 福嶋依子「地政学の方法論的反省と地政学」『お茶の水地理』第32号(1991)3頁。
- 117 神川彦松「世界新秩序と大地域主義」『地政学』第1巻1号(1942)3-12頁。
- 118 岩田孝三「地政学的に見たる日本民族の大陸・海洋両面的性格」『地政学』第1巻2号(1942)37-54頁、同「地政学的に見たる生活圏と文化圏」『地政学』第1巻8号(1942)15-26頁。
- 119 川原次吉郎「大東亜地政学の出発」『地政学』第1巻8号(1942)64頁、同「大東亜共栄圏建設の倫理性」『地政学』第1巻12号(1942)3頁、同「国防国家科学としての地政学」『地政学』第2巻8号(1943)5頁。
- 120 飯本信之「地政学上より観たるシンガポール」『地政学』第1巻2号(1942)12-36頁。
- 121 有高巖「歴史上から見た満州移民問題」『地政学』第1巻2号(1942)94頁、96頁。
- 122 元川房三「ハワイの地政学的考察」『地政学』第1巻4号(1942)66-70頁。
- 123 石橋五郎「地政学の発達とその職能」『地政学』第1巻1号(1942)13-16頁。
- 124 元川房三「政治地理学と地政学」『地政学』第2巻8号(1943)1-21頁。
- 125 金生喜造「地政学の要諦」『地政学』第2巻3号(1943)43-55頁。
- 126 中原徹「地政学の科学体系中の位置」『地政学』第2巻8号(1943)22-35頁。
- 127 佐藤弘「随筆」『地政学』第1巻1号(1942)116-118頁。
- 128 Takeuchi, (note24) 21-22p.
- 129 佐藤由子(1989), 前掲(註114)107頁。
- 130 同上, 106頁。
- 131 雑誌における総論説・資料の執筆者の所属においては、陸軍関係機関の割合が最も多い(18.5%)。数値は福嶋(1991), 前掲(註116)3頁による。
- 132 日本における地政学関連の著書はほとんどが1940年以降に出されて、最低でも40タイトルを上回る。また、協会派メンバーの論文は『地理学研究』、『思想』、『読書人』、『東大陸』、『中央公論』などにも見られる。
- 133 『地政学』第1巻1号(1942)125-134頁における日本地政学協会発会式の記事のうちに127-129頁及び133-134頁。
- 134 渡邊光「地政学の内容に就いて」、『地理学研究』第1巻10号(1942)。
- 135 同上, 6-8頁。
- 136 同上, 10頁。
- 137 同上, 11-12頁。
- 138 同上, 9頁, 11-12頁。
- 139 同上, 12-13頁。
- 140 同上, 3頁。
- 141 飯本信之は回想にて「京都の地政学とはあまり連繋がなかった」とする(佐藤由子(1989), 前掲(註114)107頁)、また、村上も小牧と東京の地政学団体の関係はなかったと推測している(村上(1999), 前掲(註57)56頁)。
- 142 飯本と小牧が共に、移民問題に地政学理論の前提を見出しており、複数の地政学論者において、日本地政学の源流を何処に定めるかの議論で、その始祖として、佐藤信淵が挙げられている。
- 143 村上(1999), 前掲(註57)53頁。また、占領軍から小牧らにそれまでの作業結果の提出も求められたそうだが、資料を全て処分したため出来ないと言ったという。
- 144 佐藤由子(1989), 前掲(註114)107頁。
- 145 1970年代、竹内らによって、地政学が現代地

- 理学批判の中で論じられるまでは、それ自体への学問的批判さえも皆無であった。
- 146 サイド Edward Said が a geographical imagination として意図していたものに繋がる。
- 147 「地理学に関するミシェル・フーコーへの質問」『ミシェル・フーコー思考集成VI』（筑摩書房 2000）43 頁。
- 148 根元的に地理学が「土地」やら「領土」やら「空間」などと言った言葉を含有する時に、それが政治と鋭くリンクしていることは、我々が普段意識する以上に明確であろう。その意味で、ラッツェルが、国家学が大地と国家の関係を軽視していることに対し政治地理学を考案して補完しようとしたことは、実は至極当然に存在しうるはずの政治—地理関係を（再）認識しようとした試みであり、地理学が包含していた権力性を発露しようとした——彼がそれを認めないとしても——地理学側からの最初の雄叫びであったと言える。
- 149 ジェロイド・オツァセル、ジョン・アグニュー「地政学と言説」『空間・社会・地理思想』第3号（1998）155 頁。
- 150 Mary Kaldor, “After the Cold War.” *New Left Review* 180 (1990), 25-37pp.
- 151 ジェロイド・オツァセル、ジョン・アグニュー、前掲（註149）156 頁。
- 152 「丸山真男自主ゼミナールの記録 第2回（下）」『丸山真男手帖』第21号（丸山真男手帖の会 2002）13 頁。
- 153 丸山真男『丸山真男講義録第7冊 日本政治思想史 1967』（東京大学出版会 1998）14-27 頁、及び丸山真男『丸山真男講義録第6冊 日本政治思想史 1966』（東京大学出版会 2000）7-15 頁。
- 154 それを端的に示すものは地図であろう。確かに、地図一枚によって世界観が変えられるとは言えない。しかし、地図が、「我々」と「彼ら」というものを視覚的に把握させるための、おそらくは容易な手段であり、人々の空間イメージを形成しうるに最も有効な手段、であることは認識すべきである。
- （さとう たけし 北海道大学法学研究科修士課程修了）